

針葉樹会報

第108号
2006年12月



目次

表紙写真＝穂高の岳沢。登高者は倉知、撮影者は竹中	山の歌	月とスッポン	加地
編集後記	芦嶺寺と上市	山本	山本
三月会通信	剣岳長次郎谷へのこだわり	倉知	倉知
	穂高岳・岳沢／扇沢登攀記録	竹中	竹中
	展望と花を満喫		
	越後駒ヶ岳～中ノ岳縦走記	越後駒ヶ岳隊	越後駒ヶ岳隊
	付知川東股溯行	鳥本	鳥本
		尚幸	尚幸
		彰敬	彰敬
	追悼／横山院一氏	禪	禪
	横山院一先輩へ	悼	悼
	奥又白池畔での沈殿	追悼	追悼
	南	大賀二郎君の山登り	大賀二郎氏
	渋谷	滝谷のプリンス	滝谷
	丸子	在りし日の大賀を偲ぶ	中川
	中村	ジロチャンへ	原
	正一昌宏	大賀さんの傘	高崎
	14 12	都會の山仲間	倉知
	9 7 5 2	大賀さんを偲んで	永井
40 33 33 30	博俊	博貞	博貞
	新弘	平敬也	平敬也
	滋光之夫	昌宏	尚幸
	29 28 25 25 23 22 20	正司郎	彰敬
	19 18 16	16	禪

発行日 2006年12月12日

発行者 針葉樹会

印刷所 ヤマノ印刷(株)

針葉樹会報

第108号

編集人 有賀 盈

〒185-0032

国分寺市日吉町2-35-8-209

会報幹事／有賀 盈、井草長雄
川名真理、大谷公重

山の歌——月とスツポン

加地 幸雄（昭33年卒）

与謝野晶子（1878～1942）は、初期の「乱れ髪」「恋ごろも」等に収められた新鮮潑灑とした恋の歌で名聲を馳せてゐるが、中期から後期にかけて、「深林の香」や「山のしづく」の歌集題名に反映してゐるように、自然觀照に心身を浸して行く。

ここでは、四十歳代後半から五十歳代に亘つて、山の景観などを詠んだ二十余首を、彼の詩人自選の「与謝野晶子歌集」（岩波文庫）から拾つてみよう。孰れも觀山の綾を撮らえて妙。我々山好き連にも山のひとときを蘇えさせてくれるであろう。

流星が叫びしほどのかすかなる 鋭きこえ
の奥山の鳥
路やがて遠き信濃の国見ゆる 山のうしろ
に移りたるかな

美くしき指紋の如く雪残る 信濃の山の見
ゆる路かな

秋霧をかすかに吸へり山上の 八幡の池の
睡蓮の花

青木原あまねく陰の色となり 信濃の山に
雪ぞきらめく

白雪と朝のうす黄の日の光 籠れる襞の並
ぶ山かな

朝より隠れてありし常念の 峰雲を出で
友遠く来ぬ
(常念岳自体が友なのでもあるうか)

法師なる喜撰が嶽に皆ならひ つてしましや
かに重なれる山

あさ六時雪滑り木をかたにする 男女と入
りし越の宇奈月
(昭和初年の山スキー行の男女の姿は稀に
見る光景にちがいない)

越の春串柿ほどの雪をして 山立ち並ぶ朝
ぼらけかな

わが軒のつららの櫛のまばゆけれ 朝日白
馬の山越えてきて

今朝もまた友山へ行く瘦尾根に 何の疑ひ
の残れるならん

(この下の句は、瘦尾根の上下左右の曲折を
手のひらのように熟知しているであろうと言う
意か)

那須の奥山ふところの家家が 積み重ねた
雪の一筋の路
我が路とおなじ方へと引かれたる 尾根の
雪のともし灯

われ昔前座せんざが原の草に寝て 忘るるすべを
知らざりしかな

前渓まえだにも北山渓も霧湧けば 我身よりさへ湧
くこちする

波青く山のやよひの夕風に 動く湖水へつ
づくみちかな

碓氷路は二手の橋より始まりぬ 流れの音
の添ふもゝれより

花草の一尺のうくを水のゝと 霧の流るる
山のいただき

岩の群ねゝれど阻む力なし 矢を射つつ行
く若き利根川

湖が玉のすだれとなりにけり 波のゝゝゝゝ
とく月に光れば

わが向ふ炉のおもてのみ赤くして なすす
べ知らず満山の闇

あたたかし草もみじ分けみづうみを 見に
現れし細脚の山羊

リヒド、影さやかな明月から、私の最近作
なるスッポンに転じよう。勿論晶子と並列さ
せる性格のものではない。文字通り末席を汚
すことになるが、双方山好きだし、私の駆け
出しが、彼の詩人の触発という面もある。

白黒の胡蝶舞ひつゝ山案内
Black and white butterfly,
What a dancer you are!

And a mountain guide too?

五月 横若葉凍れて枯れにけり
水無月遙りてまた芽吹かばや

Oak in May hills

Leafed out

Only to shrivel frost bit.

In June may you bud again

Late and safe!

氷雪 ピッケル握る熱い手に
冷たや通り勇み立ち

Up my axe

Does ice-packed snow

Send its cold

to my hot hand.

Lets go, friend,

One more pitch!

固齧 や ピッケル握り息をいふ

Solid snow

An ice axe in my grip-

Security

dotted by fir

does a green tide send

up the cirque to a meadow

you see there.

Where shall we camp tonight
the starry cope of heaven
overhead?

山路を去年雪遙る急斜面
蹴り込み散らしたが頬濡らし

A snow bank from last winter
ハヤシの背中の真中に 紫染めの大家紋

blocks our path ahead.
kick in, scatter bits,
snow cone on the cheeks.

見ねりせば谷の茂みの芽吹き綾
もみ濃や樺淡や蘿と田畠と
Looking down over

woods in the vale

evergreen,budding green
in the shade, in the sun-
embroidery

見ねりせば雪は尾根ぞい孤を描き
樹海の潮谷を詠む

Look down afar!

Snow on the ridge line

draws an arc.

A sea of aspen

蝶の実食ぐた蝶の糞
Splotched at the center
of my shirt's back,

a sploshy family crest

a gift from a bird above

full of mulberries

一万尺の瘦せ尾根に今が盛りと群れて咲く
たるホコロ、カスティア、の、リモラ草
色の協奏曲 指揮者無けだよ

On a rocky ridge

ten thousand feet high

bloom galore

blue penstemon,

Indian paintbrush,

Skyrocket, and yarrow—

a chorus of colors

without a conductor

〈Bristlecone Pine〉

お尻搔かしたのな度々ですが
面識ありおせんじた

三本松 Bristlecone やべですね

「一束五本針、一十五分」とある通り

初めまして ミツバチよのこへ

御住所控えみやがす

大地、北米西部山岳の ワサッチ連山脈

三地蔵 七畳壁トリム塙
I must have seen you before,
and many times too—
only without recognition.

So you are bristlecone:

"five needles in a bundle,
an inch and a half long"

Happy to meet you

at long last!

Your address I note:

Southwest Ridge, Gobblers Knob

Subalpine Zone in the Wasatch

Intermountain West, Mother Earth

〈Christina's Christenings〉

A buttercup

has opened up.

Better to rename it
buttertray.

Lake Martha

is just a marsh.

Better to rename it

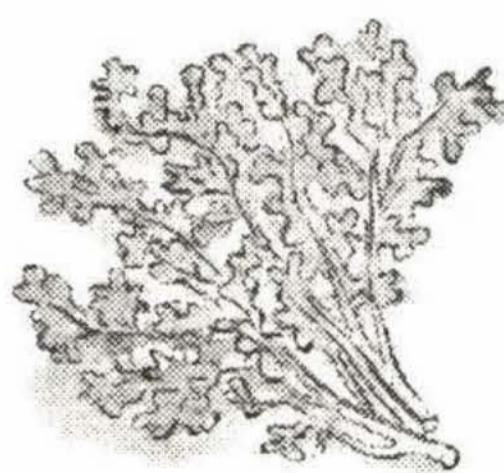
Marsh Marsha

今年は一月から六月にかけて山行三十回。
冬山から夏山へ山相変容のひと時ひと時を山
の神に満喫させて頂いた。

雪山や氷雨麓に 塩湖城
仰向けば雪山浄土 塩湖城

私の詩情は石和田さんが今はなき春日井さ
んに寄せた二首にも触発された。山の神、与
謝野晶子、石和田さん、おのおの多謝。

(注) 普通和文から始むるが、A Chorus of
Colors も Bristlecone Pine は例外。
Christina's Christening は韻葉の遊び
故、和訳不可。クリスチナは山仲間、
改名の提案者。



芦嶋寺と上市

山本 尚禎（昭36年卒）

剣岳を長次郎から登つて早月を下りる計画を倉知敬さんから聞いた時、即座に参加を決めた。昔、一年生の春合宿の早月尾根でお世話になつた上市の中島旅館や馬場島には忘れられない想いがこもつてゐる。4年前に同期の有賀と早月尾根を登る計画をたて馬場島荘の宿泊予約をしたが、台風来襲で中止した残念な思いもある。

学生時代の剣沢合宿では、長次郎谷はバリエーションルートへの玄関口であり下山時の帰路のグリセード用雪渓であつた。新田次郎の『剣岳——点の記』を読んで、長次郎谷が柴崎芳太郎や宇治長次郎達が剣岳登頂の為に見つけた唯一のルートと知つた今、長次郎谷を登頂ルートとして登りたくなつた。と同時に当時の立山登山の基地芦嶋寺へも行きたくなつたのは、私には自然の事だつた。

昔、剣へは上野深夜発の急行「北陸」で滑川に早朝到着したが、今は車で東京を朝出れば、

「北陸道」経由で昼過ぎには上市に着く。上市から芦嶋寺へは20km強。芦嶋寺訪問には丁度良い時間であつた。

立山登山の基地として昔から有名な芦嶋寺を今迄訪ねたことが無かつたのは何故だろうか？もちろん目的地剣岳へ急いだ為途中にある芦嶋寺を通過したのも一因だが、現地に行つてみて分かつた。立山へ向かう富山地方電鉄は、常願寺川の右岸沿いに東進し、芦嶋寺の手前2kmで常願寺川を左岸に渡り千寿ヶ原（今の立山駅）へ向かつて進む。常願寺川の右岸にある芦嶋寺は鉄道から取り残された集落だつた。

丁度常願寺川をはさんだ芦嶋寺の対岸にある駅は「本宮」。雄山神社のある芦嶋寺に言い訳をするような駅名である。地鉄（富山地方電鉄）と平行に走る道路は2km手前で地鉄と

別れ、東へ登りながら常願寺川の右岸を進み芦嶋寺集落の真ん中を突つ切る。今はこの道を立山へ向かう観光バスが列をなして通る。しかし、このバスも芦嶋寺には見向きもない。頻繁なバスの騒音を除けば静かな集落が残つていた。これが芦嶋寺だ。集落の中心に位置する雄山神社の太く、高い、立派な立山杉の樹林は、歴史の重みと共に周囲の空気の動きを止めているかのようだ。

雄山神社を中心とした住居地域と、死者を

弔う地域が今でも分かれているのが芦嶋寺地域の特徴。二つの地域を分けているのが、北の山から常願寺川へ注ぐ姥堂川。^{うばどうがわ}この沢のような川の東が「あの世」で墓地、実に700年も続く墓地。西が「この世」で住居地域。東西を繋ぐ橋は「布橋」。布橋を通つて「あの世」と「この世」を結ぶ儀式があるという。

「あの世」からは立山が良く見えるらしいが、その日は残念ながら見えなかつた。「この世」は室町時代から続く宗教村落で、最盛期の江戸時代後半には年間6000人が訪れ、参拝登山者用宿泊施設の宿坊が33軒もあつたという。立山曼荼羅をしながら説明してくれる立山博物館の学芸員は昔の宿坊「教算坊」の中で、益々熱弁をふるう。

昔の芦嶋寺僧坊舎配置図にある「宝伝坊」跡が、都会風の家になつてはいるが今の山小屋「剣山荘」の経営者の住居、「正治坊」跡が「御前小屋」の経営者の住居とか。「剣沢小屋」の経営者宅は雄山神社の西にあるという。昔芦嶋寺で宿坊を經營していた人の子孫が、今、剣・立山で山小屋を經營していることになる。これも歴史のなせる経過だろう。

鉄道から見放され、観光バスの素通りする歴史的宗教集落「芦嶋寺」は、今後山小屋と共に観光客の集まる場所になるだろうが、今ままの静寂な芦嶋寺が残つて欲しい。

今回の剣岳は登山以外の目的は上市町の今を知ることだ。上市町といつても、南は剣沢も含まれる非常に広い地域。当然剣岳も町中に入る。不幸な剣岳の遭難事故が起きると、TVに出るのは「富山県警上市警察署」（山岳警備隊）。それ以外に上市町が全国に知られる機会は少ない。

上市に宿泊することにして先ず探したのは、48年前の昔、春合宿でお世話になつた中島旅館の電話番号だった。宿泊関連の資料には中島旅館は無い。町役場の観光課に聞くと、今は電気屋になつているとの返事。その電気屋の電話番号に電話し、昔お世話になつたお礼を言うと、電話で応対する中島電気商会の男性は「もう女房も死んだし……」と声がかかる。

所を尋ねると直ぐに教えてくれた。教えられた細い道を二、三度曲がると木造モルタル二階建ての中島電機商会があつた。二階部分は昔の面影を残しているが、一階は電気商会の店舗だ。しかし、この家の位置が私の記憶と少し違うような気がする。上市駅と距離が離れ過ぎている。主人に会えば分かるものと、声を掛けたが返事が無い。残念ながら留守だった。

中島電機商会と駅の距離が長いという疑問は翌日上市駅で解消した。駅の改札で働く60歳前後のアルバイト風の婦人に、中島旅館の事を話すと、当時の駅は現在より100m程中島旅館よりにあつた、との事。

この婦人の話は駅の移転時の話になつた。「現在の駅は農協が建てた三階建で移転當時と同じだが、昔はスーパーもあって繁盛していた。今のように寂れたのは地鉄が悪い」。何

が悪いかわからないが、なるほど、駅前なのに自家用車もバスも少ないので町が停滞しているためと理解できた。町の様子は早月小屋の60過ぎの管理人からも聞いた。管理人は

「私は7年前に東京から上市に住まいを変えたが、上市の行政は煩わしくなくて住みよい。しかし、行政がだらしないから、町の発展がない道が不規則に交差している。街中で熟年の女性に「昔は旅館で今は中島電機商会」の場

上市にある企業は池田模範堂と日本海味噌

とか。池田模範堂は、虫刺されに効果のある薬「ムヒ」で私もお世話になつてている。駅で働く婦人によると、昔、上市は富山の売薬の卸会社が多くあり、売薬の基地だつたそうだ。その婦人も20代には売薬で全国を歩き廻つたとの事。江戸の昔、芦嶋寺の宿坊に賓客が泊まると上市から料理屋を芦嶋寺へ呼び寄せた程地域の中心地だった上市は、今から48年前頃には富山の売薬の卸会社の町として繁栄が続いていたのだ。

上市の旅館に泊まつた翌日の4時、上市町から見える剣岳を確認するため上市町の郊外へ出た。稲穂を出した田の彼方に剣岳の尖峰が聳えている。明るくなる空をバックに、その姿は、黒く、神々しく屹立している。その手前下には幾重もの山並みが控える。

上市町は南の剣沢から北の上市駅まで広い。剣岳の東南の水は十字峡を経て黒部川に、西北側の水は早月川に、大日岳北面の水は上市川になつていざれも日本海に注ぐ。早月川には忘れられない場所がある。早月尾根や赤谷尾根への登山基地、馬場島だ。

昔、5月に馬場島から早月尾根へ登つた時の馬場島では「村人が鎌で蕨を採つて」いた。それほど人の手が入つていない地域だつた。

今は、松尾平への取り付きは芝生で綺麗に整備され、キャンプ用の炊事場まで出来てゐる。

馬場島荘は昔の場所に大きな二階建てになり、日帰り入浴も出来る。近くの水力発電所の水の取り入れ口は昔のままで、沈殿した土砂を取り除く作業をしていた。

違うのは道、水の取り入れ口の上の山を削り、広い舗装道路が出来ていた。昔、昭和33年頃の道は、発電所の水の土砂沈殿池と取り入れ口の仕切りの細いコンクリートの上だつた。今見ると、なんと狭い所を、しかも雪に覆われて更に狭くなつた所を、通つたものだ！と感心する。今では危なくて通れる自信がない。しかし、当時はここしか通る場所が無かつた。馬場島の昔は変わつたのに、水の取り入れ口は昔の面影どおりだつた。新しくなつた馬場島と昔どおりの場所に出会い、剣岳を登り終えた充実感が湧いてきた。良い山だつた。

会員の皆様は、何故馬場島の水の取り入れ口にこだわるのか不思議に思われる,sizeof。それは、昭和34年卒業の方々より36年卒業までの会員に聞いて下さい。幅広い年代の揃う針葉樹会の方に私事を書いた事をお許し戴きたい。そのお許しも含めて富山への車のルートの距離を記したい。ご参考にしていただければ幸いです。

○横浜—東京—首都高—関越道—信越道—

北陸道—上市……510 km

○上市—有峰口—有峰林道—新穂高温泉—中房温泉—松本—中央道—横浜……390 km

○上市・芦嶋寺・上市周辺の走行……100 km

所要時間は利用日で異なるので略しますが、帰路を指定した同行の倉知さんの行き届いたナビで快適なドライブでした。但し、有峰林道は熊が出るそうです。

剣岳長次郎谷へのこだわり

倉知 敬（昭38年卒）

長次郎雪渓は、熊の岩の通過がポイントになるが、雪の橋を渡る楽な登高だつたし、雪の状態も極めて良好、小屋5時発、長次郎乗越9時半で、ほぼ計算どおりの登高。広大な長次郎谷の景観は、昔見過ごしていた美しさを強く感じさせるものだつた。早月尾根の下りはまことに長い。上部は鎖のベタ張り、樹林帯は暑いだけ、無雪期の早月はまた別の山というべきだろう。

今夏、山本尚禎さんと二人、長次郎谷から剣岳に登り、早月尾根を下つた。行程概要是次のとおりである。

7／30 山本氏の車で北陸道経由、上市まで。

芦嶋寺の僧坊など見物後、上市駅前・生駒屋泊。

7／31 上市—千寿ヶ原—室堂—雷鳥沢—別山乘越—剣沢小屋泊。

8／1 早朝大雨、停滞。

8／2 剣沢—長次郎谷—剣岳本峰—早月尾

8／3 馬場島まで下山—生駒屋までタクシーより有峰林道—中央高速—帰京。根—早月小屋泊。

ご高承の通り剣岳の初登頂は、頂上で発見された槍身と錫杖の頭が物語るように大昔修験者が成し遂げたわけだが、記録に残る登頂の最初は、1906年（明治40年）、測量技師・柴崎芳太郎の一行がガイドの宇治長次郎に導かれて、後に長次郎谷と名づけられた北面の谷を経て為しとげられた。

もっとも柴崎芳太郎自身は登つておらず、長次郎も稜線までガイドして登つたが宗教上の理由から（当時は立山信仰の時代で、剣は登つてはならない禁断の山だつた）登頂していない。二年後、吉田孫四郎ら日本山岳会隊をガイドした時は長次郎も登頂し、登山史上

有名な頂上記念写真には端に姿を見せていい。ちなみに修験者の初登ルートは大日尾根・別山尾根経由ではなかつたか、という。

測量登頂から百年目の今年、国土地理院は、往時は持ち上げられなかつた三等三角点の標石を設置し、GPSで正確な高度を測定、2999m（小数点切り上げで）を記録した。柴崎測量官は、頂上に建てた標柱を周囲の山々に設置したいくつかの三角点から観測、三角測量で計算して2998m（小数点切り下げで）としたのだが、標柱は頂上の最高点に建てたわけではないので、その誤差を調整すれば百年前の測量は実に正確だつた、という事実が明らかになつたわけだ。その間、一時は写真測量の結果を採り上げて3003mとした時期もあつた。

百年目とか標高とかいう数字そのものに特段の意味はないとしても、そういう区切りのお蔭で時の経過が圧縮されて当時の様子が身近な出来事のように思われる。そこでこの夏、登山史の文献に目を通したり、新田次郎の小説『剣岳・点の記』を読んだりして、未登と思われていたこの難峰を登ろうと苦心した顛末を追いかけ、残された記録に現れない事実はどうだつたのか想像して楽しんだのだった。いま剣岳に登るとすれば、高齢者というハンディを負つても楽に登れ、そして何がしか

登り甲斐あるルートを選択するとどうしても長次郎谷に行き着き、それが初期登頂ルートに合致するのが興味深い。まつさらの状態でこの山を登ろうと周りを偵察すれば、この北面の谷を詰めるのが一番いい、という結論になるだろう。

七〇歳に近い老人たちにしてみれば、今や情報や交通の発展のお蔭でそれが登れるのだから幸せと言うべきだ。また、数字を言うなら、私としては初回に登頂した高校二年夏合宿時が丁度五〇年前の1956年だつたから、山とかかわりを持ち続けて来た半世紀の人生記念としての登頂をした意味付けの方がピンとくるが、昔は下山路としか考えなかつた長次郎雪渓とはいえ、この歳でも登れたという結果はうれしい。

昨年、残雪期にはチャンスを逸したが、夏

になって尚立派な雪渓残る飯豊・カイラギ沢（石転び沢）をつめ北股岳に登つた。難しいルートでもなく、傾斜の強まる稜線直下は既に草付き斜面が露出し踏跡もあって拍子抜けではあつたが、猛暑の中で水蒸気漂う冷蔵庫の中を行くが如しで、まことに快適だつた。つづいて横尾本谷に出かけたが、時期が九月初めだつたから雪渓登りというより石渓（谷の上部は伏流となつて石の谷そのもの）巡りだつた。隣の涸沢と比べ普通あまり注目されないが、登つてみれば斬新な雰囲気でスケールも大きく、雪の谷を登るという趣旨からずれてしまつても、横尾谷の登高気分は悪

ヒマラヤで挫折したわけで、最早重荷とか幕営とか体力不相応の要素は排除するしかないのが明らかだつた。

ではどうするか。幕営とラッセルが不可避の積雪期登山を諦めるなら、労力回避の擬似積雪期登山で代用するしかない。それには、残雪期から夏にかけて、雪を踏むルートを選び、小屋泊まりの軽装で登るがいい、また尾根には岩場あり凸凹ありで劳苦多しだから雪の沢を登れば楽だ。こうして、環境厳しい寒い季節は避けて、安定した天候が期待出来る時を選んで雪の谷を登ることをテーマとして考えることにしたのである。

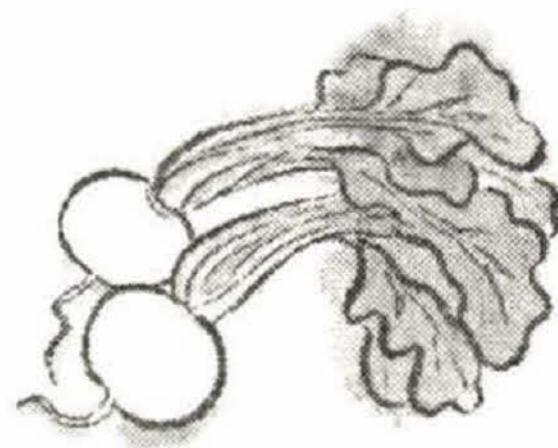
さて、実は長次郎谷を登ろうとするに至るまでにはいくらかの過程があつた。二年前に遡るが、尚禎さんたちとネパール・ヒマラヤの処女峰を目指した。その失敗の顛末は会報103号に報告したところだが、その計画の発想は以前から二〇年来実践してきた「お正月の山」の延長線にある。

冰雪の冬山を対象に身の程の範囲ながら努力するというその発想は数年前氣力喪失して終わりにしたが、また最後のあがきを試みた

くはなかつた。

そして今年、五月に岳沢に入り、扇沢をつめた。奥穂に一気に登る雪渓コースは、折りしも多雪の年だから見事な雪の斜面が伸び上がりついて、実にねらいにぴったりであり、慎重に登つたので時間は要したが楽しく登つた。

次に登つたのが今度の長次郎谷、上述のように時宜も得て、まことに言うことない山行だつた。それは大変結構だつたのだが、しかしながらこれから先、これに劣らない舞台をどこで見つけたらいいのか、実は困るのである。



穂高岳・岳沢／扇沢登攀記録

竹中 彰（昭39年卒）

針葉樹会会員の諸兄姉にはお馴染みの「上高地から仰ぐ山岳景観の核心は扇状の岩壁が形造る奥穂高岳山頂である。あれを直上すればさぞスッキリした登山となろう。それにはそこに突き上げる扇沢を登ることになり、それなら雪の締まつた残雪期に登るのが最適だろう。今回は結果として扇状の右端に延びている雪壁を登つた。登り切つた所は、山頂と南稜の頭との略中間に当たる」

以上の様な倉知さんの誘いに、当方も学生時代の岳沢合宿参加以来40年以上遠ざかっていた岳沢に足を踏み入れ、未体験の扇沢を直上するとの倉知さんのプランと、実力、経験など遙かに優れた倉知さんとパートナーを組めることに惹かれて、ゴールデンウイーク後の山も静かになる時期を選び決行することとした。結果に於いては計画通り完遂出来たが、個人的には反省点も色々と残すこととなつた。

5月24日（水）
山行直前に明らかに天候が崩れ、その後には全国的に高気圧に覆われ好天がほぼ確実に予想されることになつたので、出発日を一日後にずらし、5月24日昼のあづさ17号で上高地・西糸屋別館に入ることとした。
松本駅で倉知さんと落ち合い、流石に平日でがら空きのバスで新島々から上高地に入る。松本到着の直前には夕立の様な強い雨も降つたが、上高地では梓川は普段見る砂州も交えたゆつたりした流れと異なり、満々と水



岳沢ヒュッテ跡

を湛えた急流であつた。

西糸屋別館の位置確認にやや手間取つたが、無事別館に投宿。本日の客は我々2名だけのこと。昨日泊まつた女性が今日岳沢方面に向かつたので、帰つて来れば岳沢の情報もあるかも知れないとのこと。然し、翌朝の早立ちもあり、早々に就寝。

5月25日(木)

4時過ぎに起床、前夜に用意して貰つていした朝食の弁当とお湯をザックに入れ、出発直前に昨日岳沢方面に出掛けた女性から30分も登るとデブリ(雪渓)が出て來るとの情報と我々の成功を祈る言葉に送られ、4時50分に宿を出る。

そこから30分ほど上がつた、滝沢が岳沢に合流する近くで愈々アイゼンと落石避けのヘルメット装着(2405m、竹中のカシオ時計による、以下同)。天気は期待に違わぬ雲一つ無い、これ以上は望むべくも無い快晴で、乗鞍、御岳、中央アルプスが丁度上高地の箱庭の上に鎮座。

そのまま登行を続け10時過ぎに20分程度2回目の食事(2535m)。その後、南稜側の草付きをへつてゴルジュを避け、11時ゴルジュ上部の雪上でアンザイレン(2675m)。結果的に一部コンティニュアスで進む部分もあつたが、かなりの急傾斜の雪面の登行に相互にピッケルのシャフトを目一杯差し込んで殆んどツルベ式で20m位ずつ進むことになつた。途中で竹中がビレイポイントから動き出すときに足場が崩れて少しスリップする場面もあつたが、セルフビレイと倉知さんの上からの確保で問題にはならず。

12時15分頃に上高地からも確認出来る南稜寄りの小さな露岩の上で20分強食事(2720m)。その後、広大な雪面を登り「扇

を感じさせられた。

周囲には全く人影がなく、風も殆んど感じられない雪の上をコブ尾根と奥穂南稜の間の沢に進む。

そこから30分ほど上がつた、滝沢が岳沢に合流する近くで愈々アイゼンと落石避けのヘルメット装着(2405m、竹中のカシオ時計による、以下同)。天気は期待に違わぬ雲一つ無い、これ以上は望むべくも無い快晴で、乗鞍、御岳、中央アルプスが丁度上高地の箱庭の上に鎮座。

の要」部分から11時頃南稜の頭から別に派生した扇状雪壁の右端を形造る尾根に取り付き、草付とのコンタクトラインを暫く登る(2825m)。結果的に先程のゴルジュのへつりとこの草付き以外は全てかなりの傾斜を持つ雪面を登ることとなつた。

その後再び扇沢の雪面に戻り、上部の縦走路から降りている南稜の頭よりも奥穂側に寄つたガレ場の左を目指して雪上登攀を続ける。途中でガレ場の右側からかなり大きな落石が発生し、一瞬緊張するが、大きな石はすぐ雪面に出た所で止まり、小さいのが我々の右の方を下に落ちて行つて、胸を撫で下ろす。スタカットの繰り返しを続け、吊尾根縦走路の案内標識が見え始め、ガレ場に入つて17時20分に長かつた登攀を終え縦走路に飛び出す(3085m)。南稜寄りの岩の上には雷鳥が一羽、今我々が抜けてきた岳沢方向を睥睨する様な形でじつと佇んでいた。

ザイルを解き、アイゼンも外し、身軽になつて奥穂を目指す。17時55分に奥穂を通過し、日没との競争で穂高岳山荘を目指すが、夏道の途中には何箇所か急傾斜の雪渓が残り、捲き道を確認しつつ、倉知さんの積雪期ルートの記憶に従つて山荘直上部の鎖り場、ハシゴ場に取り付き難なく下り、山荘に18時57分到着(2920m)、宿泊を申し込む。

同じ様なタイミングで、涸沢から登つて来た先客が1名いたが、「食事はどうしますか」との受付の女性の声に、「遅くてご迷惑をお掛けするが、可能ならお願ひしたい」とのやり取りで、「30分後に準備出来ます」と優しい声にホツとしている。裏の方から横柄な感じの男が出て来て「こんな時間に付くのは非常識、遭難して死ぬのは勝手だが、遭難で迷惑を被るのは我々だ」。倉知さんが「我々はビバークの用意はしていたが……」と言ったのに對して、「それならその辺でビバークすれば良い……」等大声で怒鳴りつけてくる。只でさえ予想以上に遅く着いて申し訳ないとの気持ちでいた我々も、すっかり気分を害してしまった。

この夜の宿泊客は結局この3名であった。涸沢から来た客はザイテン横の沢を登る途中で、涸沢から望遠鏡でウォッヂされていて、途中で蹲つているとの電話連絡が穂高岳山荘にあり、従業員が確認に向かつたとのこと。要は写真を撮りながらユックリ上がつて来たのが真相の様だった。

この小屋番（？）の発言に関して、倉知さんは「稜線上の小屋の存在は、登山者を助けるのが本来の役割であり、遭難者は迷惑だとの姿勢は、もはや荒んだ風潮と言うしかなく、遭難者を助けたらそれこそが山小屋を開いた

意味があつたのである。儲けだけの宿屋を経営する者に山小屋をやらせる資格はない。勿論、逆にトレーニングや準備を怠る登山者に登山する資格もないが……」との厳しいコメントを披露されていた。

食事が終わると他にすることもなく、疲労した肉体を休める為に早々に就寝。

5月26日(金)

3時頃から同室の例のカメラマンが起きて（涸沢岳にシャツターチャンスを求めて登る

に上がった地点の確認をし、写真を撮りながらどんどん高度を下げ、3ピッチの9時10分に本谷橋に着きアイゼンを外す(1730m)。その後はひたすら夏道を下り、横尾10時8分、徳沢11時12分、明神12時11分と快調に飛ばし、12時50分には河童橋の袂で観光客に混じつて昨日のルートを確認し、ルート上部の写真を撮る。但し下部はコブ尾根に遮られていて上高地からはハツキリとは分からず、前穂への重太郎新道の途中からが一番の観察ポイントかもしだれない。

「良い……」等大声で怒鳴りつけてくる。只でさえ予想以上に遅く着いて申し訳ないとの気持ちでいた我々も、すっかり気分を害してしまった。

この夜の宿泊客は結局この3名であった。涸沢から来た客はザイテン横の沢を登る途中で、涸沢から望遠鏡でウォッчиされていて、途中で蹲っているとの電話連絡が穂高岳山荘にあり、従業員が確認に向かつたとのこと。要は写真を撮りながらユツクリ上がつて来たのが真相の様だった。

尾経由での下山を決めた。

予報通り高曇りの空の下、7時25分アイゼンを着けてザイテングラード横の沢を涸沢に向けて駆け下りる。涸沢一面雪に覆われた中、涸沢を囲む馴染みの山々の姿、昨日の吊尾根

ハリは、いろいろの各種情報を収集してある程度の成算を得て取組み、結果においては計画通りに遂行できたが、やはり体力の問題（予て竹中は医者から4～5 kg の減量を指導されていていたが、寧ろ最近は增量気味、倉知さんとの体重差から同じステップでも崩れ気味）、

あるが、その食堂フロアの店に飛び込み、ビルでささやかな祝杯を挙げた。

松本からのスーパーあづさ30号の車窓には早くも雨が流れる中、帰京。

あるが、その食堂フロアの店に飛び込み、ビルでささやかな祝杯を挙げた。

松本からのスーパーあづさ30号の車窓には早くも雨が流れる中、帰京。

トレーニング不足を強く反省させられ、当然のことながら取組む山に応じたトレーニングの重要性を改めて痛感させられた。

また、計画段階で岳沢小屋の崩壊を知り、

上高地からの2時間余、余分な時間も見込んで計画し、場合によつてはビバークも覚悟してツェルトを携行したが、天気が崩れる心配のない2日間であつたとは言え、軽量化の為に今回はガスコンロも置いて行つたことなど、稍々取り組みに甘さのあつたことは否めず、小屋番（？）の発言もその言い方はともかく、また倉知さんのコメントにも拘らず、当方に反省すべき点が全く無いとは言えない。

それにしても、上記の様な反省点はあるものの、学生時代から40年以上経つて、倉知さんに助けられたとは言え、この様なルートを登れたということは何がしかの自信を付けることが出来ると共に、長い時間を経て何となく岳沢卒業との気分であった。再度取組めと言われたら尻込みするだろうが……。

昨年は同時期に佐薙・上原さんと爺から鹿島槍を狙つたが、悪天の為に冷池小屋から吹雪の中、無念の下山を余儀なくされたが、今年は好天に恵まれ久し振りに充実した雪山が楽しめた。

〔著者注〕 右記は飽くまでも竹中個人の意見

であるが、「……」でリファードした様に倉知さんのお考へも一部反映させて頂いている。

展望と花を満喫

越後駒ヶ岳～中ノ岳縦走記

越後駒ヶ岳隊

〔参加者〕 佐薙恭（昭31年）、三井博（昭37年）、竹中彰（昭39年）、本間浩（昭40年）、川名真理（昭62年）

8月12日（土）曇ときどき雨のち晴

東京発7時8分で浦佐へ。予約していた浦佐タクシーのジャンボタクシーで枝折峠（1060m）へ（タクシー代 1万5千円）10時26分枝折峠発～15時40分駒の小屋（1895m）着／冷えたアサヒスーパーードライ500円、避難小屋宿泊料金 1人2千円（毛布付き、水は小屋の前に引いており豊富）／花＝オオイワカガミ、ヒメシヤガ、ニッコウキスゲ

枝折峠から小倉山に至る長い尾根筋の左側に荒沢岳が鋭峰を見せてくれます。左上方から次第に同高度になつてゆくのですが、堂々とした立派な山です。

駒ノ小屋は避難小屋ですが、10月まで常駐している管理人の志田さんが見渡す限りの山々を解説してくれました。荒沢岳から右（南方）にのびた先にある山が兎岳、駒ヶ岳の裏に隠れるような大きな山が中ノ岳、荒沢岳の右奥に見える双子峰は燧ヶ岳、そのさらに奥の高い山は日光白根山、荒沢岳の左側に会津駒ヶ岳、それから延々と続く長い尾根は、三岩岳、窓明山、高幽山、丸山岳、会津朝日岳などの俗称・会津アルプスです。手前に未丈ヶ岳も見えました。下方の銀山平に奥只見湖が見え、それが西方に流れ、田子倉湖に注ぎます。その対岸に浅草岳の大きな山容がありました。その左奥には守門岳が霞んで見えました（三井）。

同宿の神戸からの単独行者から我がパートナーは「お姫様と4人のお付き」との声も（竹中）。

駒の小屋の前には大展望に面したベンチが6組分ほど用意され、とても居心地がいい。そこでなごやかにスキヤキ鍋をつつきました。三井先輩には入念な計画、佐薙先輩には着実なベース配分、本間・竹中両先輩にはお

ガマ、エゾシオガマ、コゴメグサ、ミヤマアキノキリンソウ、オヤマリンドウ、ヒメシャジン、シモツケソウ、ニッコウキスゲ、ボウフウ、ハクサンフウロ



中ノ岳へ

視界は余り利かないが、近くの荒沢岳の山容を終日眺めながらの、暑い縦走の1日となつた。ただ、縦走路の東側の斜面には多くのお花畠があり、色とりどりの花が咲き揃っていた。お姫様から道中レクチャーを受けるが、判るのはその瞬間だけで、なかなか身につかない。

檜廊下など岩の間、ザレ場などなかなか厳しい登下降降を強いられ、笹藪が一部刈り込まれ、道が開けられている部分もあるが、刈った葉っぱがそのまま道に残る為、滑りがちである等、意外に体力を消耗。

小屋に着いた所で、丹後山まで行く計画を変更。本日の行動はここまでとし、明日、生姜菊、しらたきに加え、特製の割り下と生姜も付いた超豪華なもので、感激しました（川名）。

8月13日（日）晴ときどき曇

5時28分駒の小屋発、5時43分分岐、5時49分—55分駒ヶ岳頂上（2003m）～10時50分中ノ岳避難小屋着／花ヨツバシオ

いしい夕食のご手配をしていただき、感謝しております。とくに夕食は牛肉、マイタケ、春菊、しらたきに加え、特製の割り下と生姜も付いた超豪華なもので、感激しました（川名）。

先に2階に寝場所を確保。但し、前夜駒の小屋で、中ノ岳避難小屋にはネズミが出るとの情報を仕入れていたので、本間氏が食糧関係は天井から吊るし、その他の器材と共に1階に寝る事に。昼過ぎからはお姫様の帰りを待ちつつ長時間の酒盛りを始めた。

夕方には東側に湧いたガスのスクリーンにブロック現象が出るなど奇観も（竹中）。

中ノ岳からは越後駒ヶ岳、八海山が立派に見え、三山の中心的存在として君臨しています。兎岳と荒沢岳の間に平ヶ岳が、ぐつと右方に巻機山が見えました。中ノ岳からの下りで今回カットした兎岳～大水上山～丹後山の長い稜線が目の前に展開しました。いずれかの機会に再チャレンジしたいものです（三井）。

水くみから戻ると、先輩方が心なしかショボリとした風情で車座になつておられました。そして「さつき祓川から登つて來た人に『あんなところまで女の子ひとりで水くみに行かせるなんて』と叱られた」とおっしゃるのです。えつ？と思いましたが、その人が誰かはすぐわかりました。祓川にはスノーブリッジが不安定に乗つていたので、その脇の草付き斜面をトラバースして、ちょっとした段差を後ろ向きに下りたのですが、そのとき祓川にいたのがその人です。私がザックからペットボトルを何本もとり出して水をくんで

いるのを見て、かなり驚いたようでした。

一方、私はお花畠を愛でながら、気ままに歩いておりました。タテヤマリンドウ、キンコウカ、ハクサンコザクラがそれぞれの群落をつくり、みごとでした。とくに祓川周辺には草原が広がり、桃源郷の趣。先輩方にお世話をなりっぱなしだつたので、少し貢献できたのも、うれしいことでした。

ブロッケン現象は初体験。腕を広げると影が左右にビヨーンとのびるのがおもしろく、童心に帰つて何度も腕をばたつかせました（川名）。

8月14日（月）薄曇のち晴

6時47分中ノ岳避難小屋発～6時52分～
7時8分中ノ岳頂上（2085m）～8時3分

七合目（ほぼ日向山に向けて尾根筋を辿るが上部は笹藪の中の急下降、その後六合目の間に虎ロープが張られた個所も。雪渓の残る池塘も）～8時53分日向山（五合目）、最後に鎖の設置された階段を下つて11時5分十字峠登山センター（510m）着／花マツムシソウ、ウツボグサ、イブキトラノオ、ノリウツギ

急下降中ひたすら念じていたビル350

円。胡瓜、漬物等のサービスも。下に着いた時にタイミング良く、尾根の途中から携帯電話で予約した浦佐タクシーのジャンボタクシーが到着、全員揃つた所で11時35分に越後湯沢に向けて出発。湯沢までの料金は浦佐～枝折峠間とほぼ同じ1万4500円。

湯沢では駅構内の温泉で汗を流し、同じく構内の高原ビールの店で生ビール、鶴齢・八海山等の地酒とつまみで時間調整の後、15時7分の始発たにがわに乗車、佐薙先輩差し入れの八海山を車中嗜みつつ帰京（竹中）。

中ノ岳から十字峠に下る尾根の上部は、岩、お花畠、雪渓が立体的に景観をつくり、全程のなかでも特にフォトジェニックな場所でした。楽しい山旅をありがとうございました（川名）。

〔注〕 HUHACメーリングリストに投稿された竹中氏の山行報告、三井氏の展望の記録を元に構成。行動記録は竹中氏、花の記録は川名が担当。

付知川東股 湖行

（参加者） 山田秀明、鳥本真司

鳥本 真司（平16年卒）

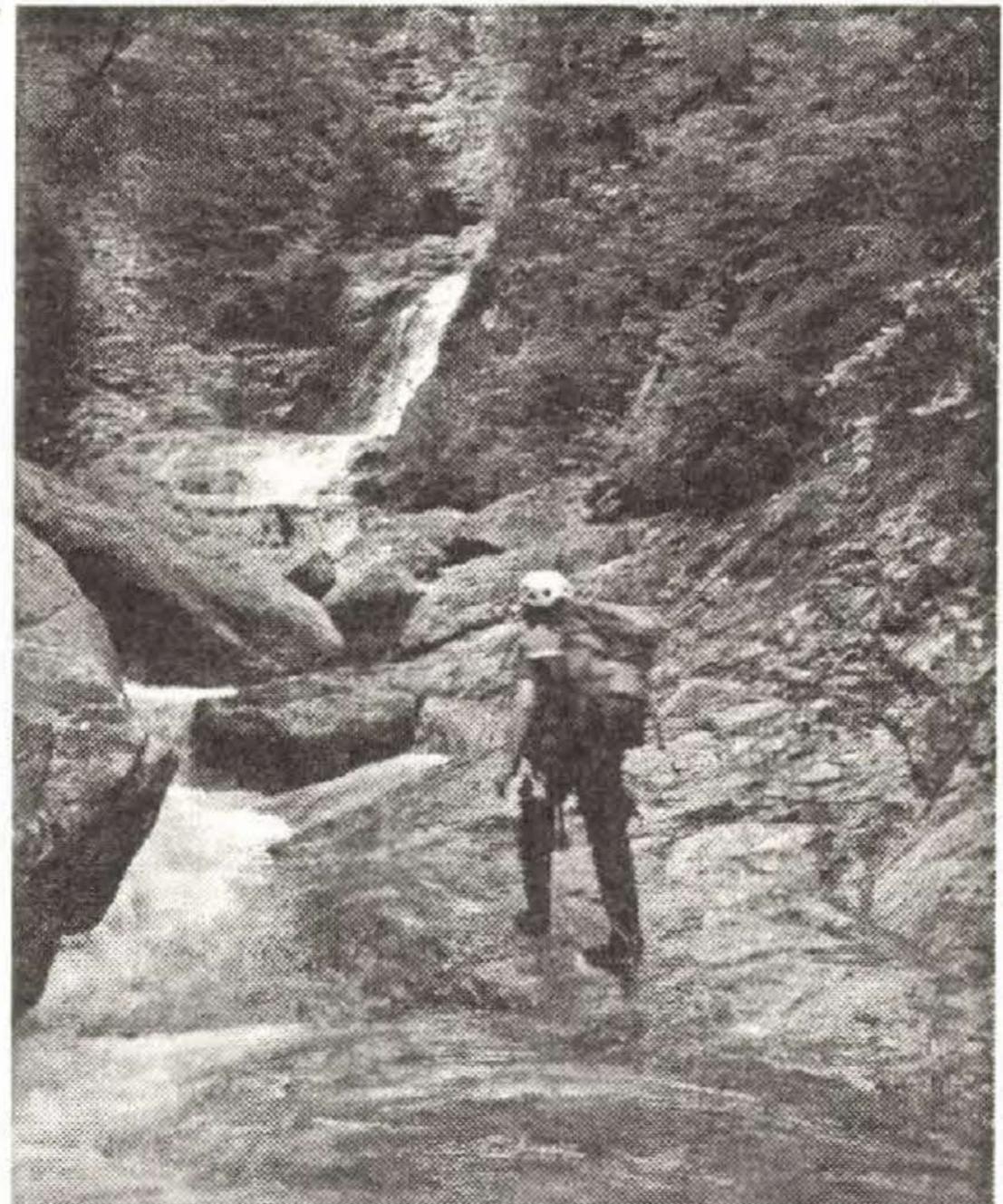
「塩見バットレス、行こうぜ」「えつ、北岳じゃないんですか」

「塩見にもあるんだよ、全然登っているヒト

もいなくて、ろくに記録もないルートだぞ」。何でも、塩見を北の南荒川から登り詰めて山頂に至るルートということで、塩見バットレスは塩見岳北稜に聳えているそうである。南アルプスは北岳くらいしかピークを踏んだ経験もなく、自分にとつてほとんど未知の領域である上、その中でも更に未知のルートというのだから、惹かれる思いはかなりある。

ただ、天気と自分の力には今一つ確信がもてないでいたから、週末の天気がとてももちそうになく、塩見の予定を変更しようということになると残念な気持ちとともに「今はまだ、ということかもしれない」という思いを抱いたのも事実だ。

さて、では代わりにどこに行こうかという



付知峡を行く山田

話の中で、山田さんが推したのが岐阜は中津川の付知峡にて沢登り＆魚釣りを楽しみつつ、沢を登り詰めた先に聳える奥三界山の頂を踏むというもの。沢の左側をずっと林道が走っているので、いざ天気が崩れた場合にはエスケープルートとして簡単に抜け出すことができる大きなポイントだ。

今、浜松で生活している自分にとって、中津川はクルマで約4時間、ずっと下道（高速道でない一般道）だけで行ける場所である。金曜の真夜中に出発し、浜松の中心街を遠ざかると後はひたすら長い山道となり、夜の帳の中、その道を北上し続ける。中津川駅に余裕をもつて到着し、しばらく駅前の駐車場にクルマを止めて、仮眠する。

6時半に起きて、歯磨きをしていると山田

さんがやってきた。二人の合流は6時45分。予定より15分早い。中津川市街を遡行開始地点までクルマで向かう。付知峡のキャンプ場から更に10分ほど奥に入り、10m程度の橋を越えたところに3台程度の駐車スペースがあるから、そこにクルマを止めて遡行の準備をし、沢筋に下る。いきなり大きな堰堤が見える。しばらくは、数箇所の堰堤越えと特に困難のない河原歩きが続く。

付知峡の水は、前年に行つた大入渓谷と比較して、冷たく澄んでいて、虫は少なめであるのがありがたかったが、魚の姿は全く見えなかつたのは当てが外れた。緊張感が出てくるのは、1時間ほど歩いて左右が切り立つゴルジユ帯に入つてから。5m幅広、大水量の滝が現れ、向かって右側は水が深く取り付くのも難しそう、左からも直登はムリと判断し、左に高巻く。足場はやや不安定。

ルンゼを下つて沢と合流、やがて3m滝+1mアイルが出てくるので、これは左から登つて滝の上で足場のよい右へ飛び移つて抜ける。続いて、3m滝+2m滝で、これも前と同様、左を直登し3m滝の上で右へ飛び移り、やや流れが強いナメ滝を左へトラバースして抜ける。

大釜を抱く8m滝は右リッジから登るが、ここはヌメリが強く、あやうく滑つて沢に

落つこちそうになり思わず冷や汗、「おー、鳥本、顔がマジだな」と山田さんの言。

次は、正面左の本流に10m滝、その右側に支流の穏やかな水流のあるところ。10m滝を巻くため支流の流れる壁を登つたところ、又メリに足をとられてツルツと足を滑らせ、5m下の沢まで落つこちる。幸い、擦り傷程度で済む。別に難易度の高いところではなかつたので、「油断した!」という感じが強い。

ここまでがゴルジユ帯の前半で、後半は5つほど滝が出てくるがいずれも直登は難しそうであったため、高巻く。7m程度の滝の向こうに右から入つてくる爆流のある地点は山田さんが最初の滝を登り「登れそうだ」という判断を下したが、山田さんはともかく自分で難しそうと見て、右から巻くことに。その先に堤防の下をくぐりぬけるところがあり、ここは見た目は深そうだが実際には何とか立つて歩いても抜けられる。堤防のすぐ向こうの水流がちょっと強いため、押し返されるというほどでもない。

それ以降は単調な河原が続き、核心部は過ぎたかなという思いがしたが、幕営予定地の手前に最大の難敵が待ち構えていた。約30mはあるうかという本日最大級の大滝が出現、巻くのも容易には見えず、ザイルを出して向かって左手を直登しようということに。山田

さんがリード、僕がセカンドで。

最大の核心は最上部の5mほどで、ツルツルしている上、つかめるところは脆い草つきで非常に心もとない。ここを前に、1ピッチを切つて2ピッチ目で慎重に越えようということになり、さて、山田さん2ピッチ目。

この核心部を通過中に「わー、落ちる！ 落

ちるー！！」と大音量が響き、すごい勢いで落ちてきた。こちらもぎくりとして、急いでザイルをたぐつたところ、自分より5mほど下の地点、滝の中腹で止まる。幸い、擦り傷程度のようだ。今度は登りきり、自分もツルツルの核心部を上からの浮力にも助けられながら登り切る。

この滝を越えればすぐに広々と平坦な幕営地点。ツエルトを張つて、ようやく一息つける場所を確保。山田さんが突然、衣服を脱ぎ捨て、自然の姿で水の中で戯れ始めた。

「ふあー、サイコーだ！ 鳥本もやつてみろ！ 気持ちいいぞ！」続いて、焚き火、食事。焚き火の明かりは沢の中で輝きを放ち、どこか原始的な雰囲気を醸し出す。人間の原風景とでもいうべきだろうか。

就寝後、何時間後はよく分からなかつたが、真夜中になつてテントを激しく叩く雨の音が聞こえるようになった。朝になつても一向にやむ気配はなく、むしろ雨足が強くなつてい

る具合。「やめるか？」「やめましょう」。これから先の奥三界山までの道のりはまだ遠く、悪天候の中で敢えて悪路を突き進む気にはなれなかつた。更に、自分は昨日の時点で靴が足に合わないせいか、足の爪先がひどく痛んで、とても順調には登れそうなコンディションでもなかつた。

下山の方向で一致し、幕営地のすぐ左手を走る林道へ登り、あとはひたすら林道歩き。爪先の痛みで、自分にとつてはしんどい行程。1年前に行つた大入渓谷でも下りはそんな状態だったことを思い出す。前回の渓谷では「自然のまま」ほとんど素っ裸で下山していた山

★記録

7月17日【中津川駅 06:45、遡行開始 08:15、二俣 12:50' 大滝 15:00' 幕場 16:30】
7月18日【起床 05:00' 田発 06:15' 駐車地 09:00】

田さんもさすがに雨の中ではそうすることも叶わず、サクサクと降りていく。あとをノロノロと続く僕のずっと眼下に付知峡が走る。こんな高いところに道を作るなんて昔のヒトは本当に大したものだ、などとぼんやり感心しながら、一步一歩と下つてゆく。

追悼 横山 眞一 氏

南 昌宏（昭28年卒）



横山眞一先輩へ お別れのことば

横山眞一先輩へ お別れのことば

横山眞一先輩へ お別れのことば

振り返れば六十年という長いお付き合いでした。いま考えてみると、横山さんはつねに私たち山の仲間のリーダー的存在、いわば先達のようでした。私たちを力づけたり導いたりして下さいました。山にでかけるときは、とりわけ経験の乏しい私などは、誘われ先導されて、いつもあとからついていったように思います。

かねてからの私の念願だったネパールのヒマラヤ・トレッキングも、日本語教師として一年間カトマンズに住んでおられた横山さんに、すべて段取りしていただいて、二年前の平成十六年（二〇〇四年）一月中旬に実現しました。ネパールには奥様も同行されました。印象深い、忘れ得ぬ想い出です。

ネパールから帰国して二週間後の二月上旬には、中樹会恒例の乗鞍高原スキー行に二泊三日ご一緒しました。そして、そのわずか二か月後の四月にガン治療のため入院されたことになつたのでした。闘病生活に入られてからは、回復と再発を繰り返しながらも、へこたれず、前向きでガンに挑んでおられる姿は、不撓不屈、我慢強く決して弱音を吐かない、まさに山男の心意気を見る思いで、胸をうたれました。

今年の三月六日でした。ほぼ一年ぶりに如

水会館での中樹会昼食会に出席され、七名全員が顔を合わせました。その際、横山さんから延び延びになつて、宇佐美山荘合宿をやろうとのお誘いがありました。病気のことが心配でしたが、どうしてもという強い気持ちを感じて、四月二十七、八日に宇佐美の山荘にお邪魔することに決めました。

その一週間前に事前打ち合わせの電話をしたところ、「腹の具合が少し悪い」と聞きましたので、延期をおすすめし、しばらく延ばすことになりました。横山さんからの、その延期決定通知の四月二十五日付ハガキの結びに、「近い将来に集まることができればと考えています」とあつたので、私はこれを「近いうちに集まりたい」という意向と解し、体調はそれほど悪くはないのだろうと思い込み、六月早々に昼食会を開くべく、五月二十三日にお宅にお電話をしました。

そのとき、奥様から「いま意識のない状態」（危篤状態）と伺い、ショックで言葉もないほどでした。三月六日に如水会館でお会いしたときは、足が弱ったとのことでしたが、元気そうなご様子で、早い回復をみなで喜んだのになぜ急にと、ぼう然とするばかりでした。いま読み返してみると、「近い将来に集まることができればと考えています」というのは、「早くみんなとの集まりに出れるようになれるつもりです。

「いいが……」と読み取れて、そこには不安で寂しい心情が感じられて、胸がしめつけられる思いがします。

私たち中樹会は大学山岳部OBの針葉樹会のなかの小グループで、昭和二十五年から二十八年頃にかけての卒業で、テントや山小屋で同じ釜の飯を食べた、ほぼ同じ年配の仲間です。日本全体が、まだ敗戦の混乱をひきずり、貧しさのなかに漂っていた戦後間もない頃、物もお金も足りず、いまのような便利さに縁がなかつた頃に、ともに学び、ともに山に登つた世代です。この世代には共通してその当時の生活感覚や時代感覚というようなものがいまなお肌身に染みついて離れないようです。そんな同世代の共感もあって、とにかく話が互いに通じやすい稀な仲間なのです。

いま、お別れのことばの結びに、横山さんに私たちちは「さよなら」は言わないことにします。それは、すでに亡き山の仲間たち同様、横山さんは、私たちの思いのなかで、これからも生き続けるからです。先達を失つても、後ろから背中を押されながら、私たちはこれからも年相応に山を歩き、スキーを続けるつもりです。

横山さん、ほんとうにありがとうございました。

した。

平成十八年五月三十一日

(以上は通夜での弔辞です)

奥又白池畔での沈澱

渋谷 一郎（昭28年卒）

私が予科三年の夏、梅雨に入つたころだつた。横山さんは、その春に学士入学を果たし、同時に東京商大山岳部に入部し初の夏山合宿を前にして、腕を撫しているところらしかつた。こちらは前年の初夏の谷川で山中さんを失い、約一年を経て、やつと衝撃と沈滯から立ち直ろうとするところだつた。彼から「どこかへ登ろう」と声を掛けられた。

国立の部室での頻繁な語らいの中で、山への想いが煮詰まつて、合宿前に取り敢えず個人山行をということになつた。部室に置いてあつた戦中刊行の「針葉樹」の、小谷部全助さんによる巣冬期の前穂の壁の、登攀記録を繰返し読んでいたので、もし悪天候のため壁に

取付けなくとも池畔にテントを張つて過ごし、許せば周辺の状況をのぞいて来ればよいということで一致した。

当時の交通事情のことだから、新宿からの鈍行列車は松本まで立詰めだつたろうし、元の島々駅から上高地行きの旧いボンネット・バスは、梓川沿いの細くて起伏と急カーブの多い道路を、頼りなげに延々と喘ぎ走つた。徳沢で一泊したのか、どうかも記憶に無い。何しろ余りに古いことなので、前後

の詳しい記憶など殆ど飛んでしまい、ところどころハイライトのように脳裏に蘇つてくる。徳沢の少し上流の、向こう岸に奥又の出合い、白い扇状堆の押し出しが見える辺りで、本流を徒渉した。ズボンも靴も装着したままだつたと思うが、雪解けの冷たい奔流に腰上まで浸り、川底で脚を取られまいと緊張しどおしだつた。

ようやく徒渉を終え、そのまま出会いのゴロタ石を登り詰めて、松高ルンゼの直ぐ脇に付いている踏み跡の登攀にかかる。二ついたツク製のワイン・パー・テントにフライ、頑丈な継ぎ金具付きの太い何本もの木製支柱とピッケルが、びっしり茂つた灌木や野草に隠れた岩角に引掛つて難渉する。シュラフ、ザイル、アイゼン、四日分の食糧等々がずつしりと肩に応える。

両手・両脚を使っての苦闘が何時終るとも知れず続いた末に、松高ルンゼへの落口の残雪に行きついた。ヤレ嬉しさと雪上に跳んだとたん、薄い表面を踏み抜いて、背負つた重荷のために後ろへ一回転、頭を岩角にぶつけて眼から火が出た。どうにか奥又白池まで辿りつき、あの写真でおなじみの、池上に幹を斜めに突き出した岳樺の根元に設営することができた。

おそらくその朝、徳沢を出発した後、池畔



横山さんの山荘での中樹会の集りで。
左より 海老沢、渋谷、望月、中村、横山、鹿俣、南、高橋の
各氏（1998年）

のテント設営を終えたところで、初日の活動としては限界だったのだろう。泥のように寝込んでしまつたらしい。これで翌朝、雲海の上で朝日を迎える奥又の雪渓を踏んで前穂の頂上直下あたりまで行ければ万々歳だったのだが、実は全然その反対だった。

来る日も来る日も雨と濃霧にこびり付かれ、たまに夜分、かすかな星明りに前穂から四峰にかけての稜線を見わけて翌日を期待するも、夜が明けてみれば変わり映えのしない雨か濃霧の悪天候が続いた。

一日三食を二食にして、四日を七日に食い延ばして頑張るが、どうとう食材が枯渇した。食事と用足しのほかは、ほとんど一日中テントに閉じ込められて話題も歌もタネ切れとなる。七日目の夕食後とうとう天気の好転に見切りをつけて、翌朝の撤収を決めた。一週間で池底の雪も雪渓もだいぶ後退して梅雨明けの近さを思わせたが、もはや未練もなかつた。一週間分の雨を吸い込んでズシリと重みを増したリュックも、ルンゼ脇の降路の峻険さも、水嵩をまして恐ろしげな梓川の徒渉も、実感として記憶に無い。憶えているのは松本からの終列車に間に合つて、ほつとした瞬間のこと。

現役時代の横山さんの記憶としては、彼の最上級生の時の冬、五竜合宿でのテント火災

(遠見尾根)でぎゅうぎゅうに絞られた一件があり、いまだに中樹会で話題になつてゐるが、今回はあまり話したことのない奥又白の失敗談を書いた。

横山皖一さん

中村 正司（昭28年卒）

社会生活を終えた頃、山岳部時代に一緒した年代が再び集まって登り始めた中樹会。もう20年程になろう。その間に佐藤、小泉、望月各先輩が他界し、唯一の先輩となつた横山さんに何かとリードして頂いたが、悲しいかな我々を残して他界された。

卒業して東京海上に入社、翌年に私も縁あって同社に就職、公私に亘りお世話になつたが、しばらくして太田（可）教授が手術を終えて退院された折には、二人で頭をしぼり合い「ハバカリを祝す」と祝電を打つたところ、先生には事のほか喜んで頂き、生涯話題にして頂いたが、「世にはばかる」なんて云い合える横さんの人柄に改めて敬意を深めたものである。

社内には、その後山岳部から宮川、各務両君が入り、小針葉樹会も続いたのは實に横山さんのご人徳による。退職後は社のO.B誌に、日本語教師として中国、スリランカ、ミャンマー、ネパール各地で指導され、多くの生徒に後々慕われてゐる生活が掲載されたり、また近年ガン闘病記を掲載、その第二報は没後の掲載となつてしまい、人々に惜しまれた。

顧みれば、横山宇佐美別荘の合宿も、帰国の折には恒例のように集まつては、夜のかがり火を囲んで痛飲したが、この春は特に実現を望まれたにも拘らず遂に果たせなかつた。昨年の乗鞍スキーコンペでの夕食は、何時ものようす唄あり、小話ありの楽しいひと時を与えて頂いたが、あれが最後の山行となろうとは。

心から冥福を祈る。

追悼 大賀二郎 氏

大賀二郎君の山登り

中川 滋夫（昭36年卒）

7月18日、大賀二郎君（昭36年卒）が帰らぬ人となつた。68歳。

1957年春、国立の部室での新入部員歓迎コンペ以来、50年に亘る交友の中で、一番印象深いのは彼の学生時代の岩登りに対する激しい意欲・打ち込み振りであろう。それは正にピュアな青春を賭けた情熱のほとばしりであり輝いていた。

新入部員が10名以上おり、少し絞るべしと上級生が考えたかどうか知らぬが、徹底的にシゴかれた。高校山岳部経験者は石と中川だけで、生活技術から地理・気象・雪上訓練・

東京で生れ育ち、高校は開成高校。野球とバスケットで遊んでいたシティボーイが、一橋に入学するなり山岳部に入部した。何がきっかけで山登りをする気になつたのか不明だが、とにかくヤル気満々の新入部員だつた。

同期十数名のスポーツマン的存在で、「ガン張つてヤローぜ」と異口同音でいいだしたことから「ヤロー会」結成につながつた訳だが、「ヤロー会」と云い出したのは大賀が最初

176センチの長身、手足の長いスラリとした体つきはロツククライミング向きで、おまけに指が長く、握力も強く他人が届かないホールドも捉えうるアドバンテージを持つていた。

岩登りに必要な要素は何か、についてもよく議論になり、バランス、度胸、心技体、ルート設定センス、集中力等々出た中で、大賀は、一に腕力、二に腕力、三四はなくて五に腕力などと言つていた。

1953年、エベレスト、56年マナスルが登られ、国内では57年、井上靖の『氷壁』が

とで強くなつていくのではないか。己の限界を試すことにより次のステップが見えてくる」と主張していた。



練習の積み上げで強くなるのはスポーツ一般だが、本番の積み重ねで強くなる山登りは一步間違うと命をとられるという特殊性をもつものだけに議論も白熱したものだつた。

一年間の下積み生活を終え心身ともにたくましくなつた大賀は益々意氣盛んで、前期合宿をヤローぜと6月前穂岳沢合宿を持った。

牛ちゃんと残雪のコブ尾根を登つたのはい

いが、ガスにまかれ飛騨尾根に迷い込みビバーク。石等をヤキモキさせる一幕もあつたが、順調に成長、岩登りに己の才覚と能力の発揮場所をみつけた。

岩登り・荷揚げ・縦走とトータル的な登山技術をみっちり叩き込まれ、そのせいか冬を待たずして数名退部していった。

バテかたを知らぬ者多く、如何にバテるかについて議論になつた。ぶつ倒れるまで頑張り抜く敢闘・玉碎派と、山登りはボクシングでもないしマラソンとも違う、常に余裕を持つて一歩一歩前進すればよいとする余裕派との論争で、大賀は「バテの経験を重ねること

話題になつてゐた時代で、穂高・剣・谷川岳等で次々とバリエーションルートが登られていった。

身近では、57年3月、甘利さんが前穂四峰正面松高ルート積雪期初登、同8月、滝谷グレポンをY中さん・T中さんが初登攀、58年12月には戦前から一橋山岳部になじみの深い北岳バットレス中央稜を甘利さんが初登され、益々山登りにのめり込んでいった。

大賀の主な登攀記録を拾つてみると、

1958年(2年生)

7月(合宿) 初めての滝谷。第三尾根。

8月 一ノ倉鳥帽子南稜

10月(合宿) 北岳バットレス・四尾根

11月 岳沢南股トリコニー・コブ沢より一峰バットレス、続けて初冬の鹿島槍

1959年(3年生)

7月(合宿) 劍本峰南壁A2—3

8月 前穂四峰正面新村ルート

滝谷ドーム中央稜。四峰松高ルート。滝谷第二P2フランケ芝工大ルートおよび第一尾根。

10月(合宿) 滝谷三尾根。このあと東大

の雪崩遭難事故救助。

1960年(4年生)



1958年5月、大学2年の谷川合宿にて。
前列左から2人目が大賀氏

大賀は筆マメだった。登攀の成功例も失敗例も冷静にキツチリと記録に残した。

——「岩」と聞くと胸がおどる。唇をなめ、息をはずませ、岩肌をなでまわすあの気分。嬉しくなつて、前の晩は眠れないほどだ。ところが、今度ばかりは恐怖の言葉を日記に書きつらねて、家を後にした——(針葉樹12号)この山行は丸子さんと共に大賀に同行しただけに当時の心境がよくわかる。幸い天候に恵まれ、滝谷・四峰正面で心ゆくまで岩登りを楽しめ、すっかり自信をつけた山行になつたのではないかと思う。

翌1960年最上級生になつた大賀は、夏合宿延長戦に剣・三の窓に入り、チンネ登攀後、当時「熟達者向き」といわれていた剣尾根主稜に2年生の後閑とアブミ一つしか持たず完登している。

当時はヘルメットも着用しておらず、ザイルは重い麻、埋込ボルトもなく所謂古典的なクライミングスタイルで、アブミ一つで剣尾根を、わずか数年の岩登り技術と経験で完登できたことは驚きであった。大賀が如何に岩登りに卓越した技術と精神面の強さを持っていたかの証明であろう。

此の時の登攀記録で『針葉樹』13号に彼は

12月 北岳バットレス四尾根(敗退)。

付記として次の様に記している。

——この登攀記録当時（1960年）、剣尾根（無雪期）は普通下半上半に分けて登られていた。下半だけでもビバークする例がよくあつた。そしてドームの登りの悪さは、熟達したクライマー以外は寄せ付けないとさえ云われていた。

しかしすべてのルートは年月と共に容易になる。今ではドームの登りは残置ハーケンによる連続吊上げ技術をためす絶好のゲレンデになつた。したがつて、岩壁登攀の妙味は乏しい。だが、剣尾根全体は一つの「山登り」であり、池ノ谷の底から剣の主稜線にぐうんとのし上げ、長次郎の雪渓を脚下に見下ろす気分の良さは、将来とも変りがあるまい——

1963年、日産自動車の社員であった大賀は会社の帰路、京浜東北線で列車事故（鶴見事故）に遭遇し九死に一生を得た。「気がついたら星空が見えた」と語つていたのが印象に残る。

数ヶ月間、献身的な看病をしたのが、実母と会社同僚の妙齢の女性だつた。ある日、看護にあたつていた実母が手をさしのべ大賀の手をとつた所、寝ぼけていたのか「この手じゃない！」と母親の手をはねのけ、件の女性の手をまさぐり求めたとのこと。この妙齢の女性とは後に愛妻となる恵子夫人で、大賀らしいストレートな言動で、母親からの離脱宣言であり、未来へのホールドを求めたものとして考えさせられる。

この事故を契機に大賀のアグレッシブな山登りは終つた。登りたくても登れない無念の思いがあつたに違ひない。さりとて縦走とか低山趣味は大賀にはなかつた。彼のチャレン

1年前と比較し何と云う自信に満ちた発言であろうか。スポーツアルピニズムのパイオニアワークの価値をうたうと共に仮に一般ルート化した場合でもナメたらいかんルートですよと暗に述べている気がする。

今日現在、本ルートは一体どの様に登られているのだろうか興味ある所である。

ジング精神は山以外の分野で發揮されたに違いない。

今、彼を想い出せば岩壁をキッと見上げ、段取りをつけるや、長い手足でスルスルと登つてゆく若き大賀の姿しか浮んでこない。

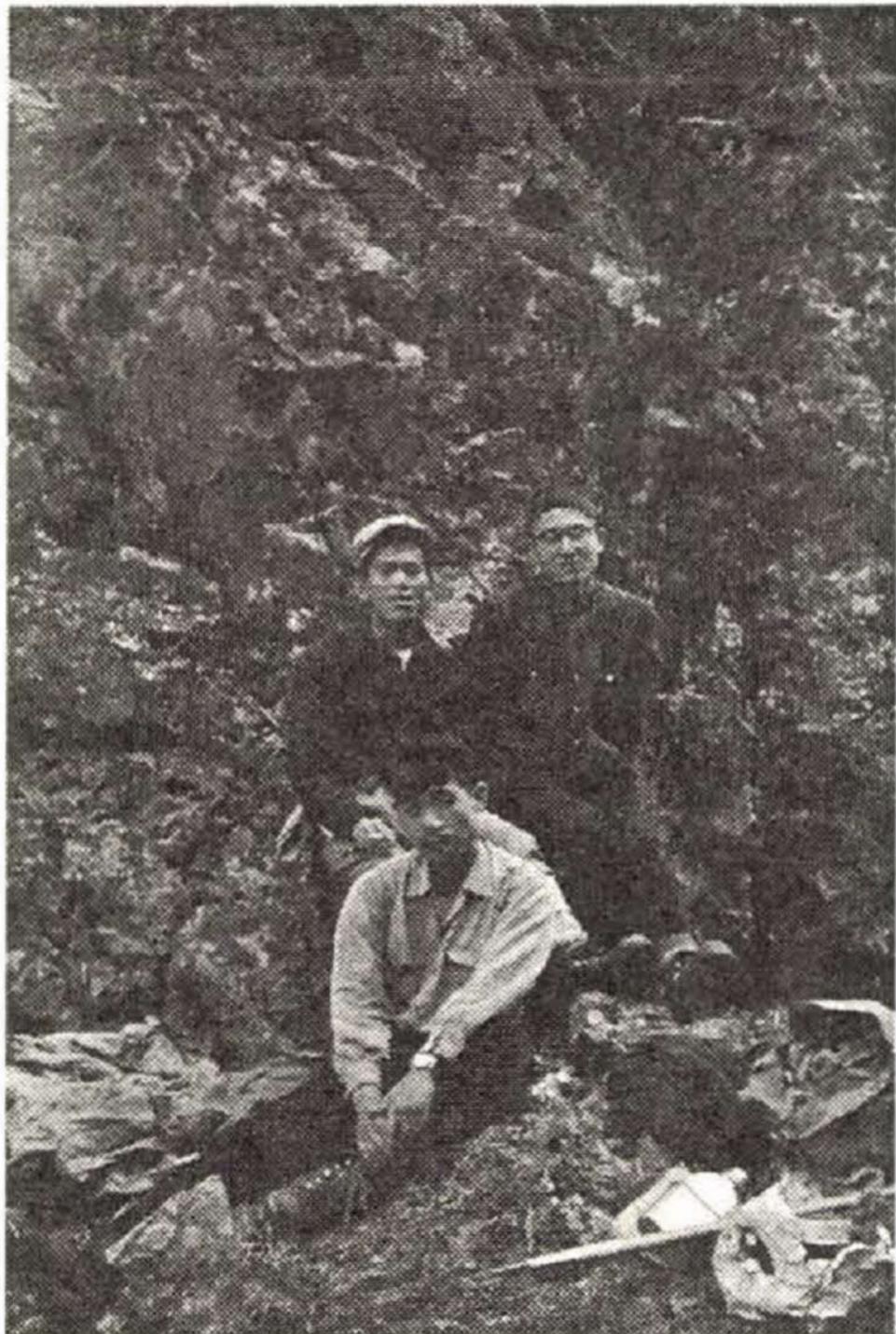
滝谷のプリンス

丸子 博之（昭35年卒）

ヤロー会とはよくつけたものだ。

トミー・リー・ジョーンズにそつくりなアンリ中川。チャールス・ブロンソンをちょっぴり上品にしたショーティ山本、偉い先生にしてはバンカラでやんちゃ、青いハンカチではなく古手拭がぴつたりのヒロミツ石。そして決して忘れられない馬力の固まり中島。戦後食糧難の厳しい時代に幼年期を送つた焼け跡・闇市派にふさわしい猛者揃いだ。

そのなかにあつて大賀二郎君は異色の存在であつた。いかにも育ちの良さを思わせる端正な風貌と洗練された物腰、温厚な性格は誰からも好感を持たれた。年次が1年上の私は



1958年、左より中川、景山、大賀の各氏

多くの合宿でヤロー会の面々と一緒に登る事が多かつたが、何故か岩登りではしばしば大賀君とザイル・パートナーになつた。

穂高・剣・谷川岳、とりわけ滝谷は二人にとって忘れられない岩場である。二人とも滝谷が大好きだつた。高度がある上にすつきりとした岩稜が切れ落ちる滝谷、登れば登るほど滝谷に魅せられていつた。今はすっかりグレンデになつてしまつたが、滝谷や四峰正面の難ルートを殆ど登り終えたときはいつぱしのクライマーになつたつもりになり胸をはつたものだ。滝谷に一番似合つていたのは大賀君ではなかつたかと思う。第三尾根を登り終え、残照をあびて稜線にすくと立つた大賀君の姿を今も鮮明に思い出す。

卒業後は殆ど会う機会はなかつた。お互いに社会人としてひたすら走る時期が続いた。

30年後思いがけず米国で再会した。大賀君は日産自動車の国際調達部長の要職にあつた。日産は1970年代に日本の自動車メーカーとしてホンダとともに相次いで米国進出を果たし、テネシー州に大工場を建設、現地生産を開始した。日本自動車メーカーの先駆け、バイオニアである。現地生産には高品質かつ競争力のある優れた部品・素材の調達が不可欠だ。国際調達部長の腕の見せ所でもある。調達の責任者となれば社内では製造コストを

左右するキーマンであり、対外的にはバイヤーとして200社もの部品メーカー群を率いる大バスとして君臨する。日産は大賀部長を団長として傘下の主要部品メーカー30社のトップからなるミッショングループを工場の進出したテネシーに送り込んできた。

私は当時ニューヨークに駐在、テネシーの州都ナッシュビルに飛んだ。日産と取引関係のある本社からミッショングループの知らせを受けたのだが、大賀団長は在米各社の代表者全員の名は知らされていない。ホテルの夕食会場で待つてみるとミッショングループの先頭に団長がいた。かつての上品な滝谷のプリンスはいつの間にかほどほどに太めとなり、気力に満ち溢れ貫禄充分な幹部となつていた。近寄つて声をかけた時の啞然とした大賀団長の顔は忘れられない。

会食が始まつたが二人は団員・現地代表をそつちのけにして話し込んだ。仕事の事は忘れて専ら山登り、岩登り、滝谷の想い出話に夢中だつた。メインテーブルの人達は訳のわからぬ別世界の話題にただただ呆れていたに違ひない。仕事漬けの日常から片時離れた二人にとつてなんと幸せな一夜だつたことだろう。ミッショングループの最後の訪問地ニューヨークでも大賀団長の一存で他社とのパートナーをキヤンセルし盛大に飲み明かした。

在りし日の大賀を偲ぶ

石 弘光（昭36年卒）

山仲間との交遊は楽しい。岩登りから遠ざかって久しいが山の写真集は離したことは無い。ヒマラヤの高峰・秀峰・大岩壁を見ていると胸が躍る。登れもしないのにルートを考えたりしている。時々滝谷を思い出す。滝谷が大好きだつた大賀君はいまでも別世界で夕日の滝谷を夢見てゐるに違ひない。

ヤロー会で、中島と牛ちゃんに次いで大賀も逝つてしまつた。まさに人生の終盤を迎えた我々にとつて、なんともやりきれない気持ちにならざるを得ない。大賀は温かい家庭に恵まれ、人生最後の時期に体調を壊し意に満たない生活を強いられたが、それなりに充実した人生を送つたと思う。

大賀との最初の出会いは、1957年4月、入学直後の山岳部新入生歓迎コンペの席上であつた。しかしそこで会う前に、大賀のことは友人を通じて間接的に良く知つていた。彼

の竹早小学校時代の仲間が、私が行っていた教育大付属の中・高等学校に大勢進学していたので、早くから大賀の話をよく聞いていた。特に、一橋を志望しているということで、親近感と容易ならざる競争相手だと感じていた。しかし、二人とも現役の時はあえなく失敗。一浪してからお互に志望していた経済学部の新入生として、初対面となつたわけである。いかにも垢抜けした都会っ子そして好男子だなというのが、第一印象であった。

合宿やキャンパス生活を通じて、付き合いが深まるにつれ、なかなか骨っぽいそして正義感の強い男であることが次第に分かつてきたり。ヤロー会の面々は山の中や部室でよくいい加減なことをしては、彼に怒られたものだ。口やかましい所もあつたが、ヤロー会において一目おかれる存在に成長していった。その後が次第に、夢中になつていったのが、岩登りとマージャンである。奇妙な組み合わせだが、当時の山好きの若者としてよくあることだつたかもしれない。

大賀について思い出は尽きないがごく鮮明に覚えていることを、以下二つほど書くことにする。第一は、2年生の6月、ヤロー会だけで穂高の岳沢合宿を行つた時のことだ。確かに3日目ぐらいに大賀は牛ちゃんと連れ立つて、こぶ尾根の登攀に出かけた。楽に一

日行動なのに、夕闇が迫つてもテントに帰つてこない。残る我々にも、焦燥の色が濃くなつてきた。ついに一晩戻らず、小生は夜明けを待たず上高地の帝国ホテルの木村さんのところまで、一人で遭難の知らせに駆け下りることになった。

夜道の岳沢で、すぐに道が分からなくなり随分迷つたが、それでも夜が白々と明ける頃には何とか木村さんの所までたどり着けた。ところが、怪しいものと思われたのだろう入り口にいた飼い犬2匹に、吠え掛けられ、そばに積んであつた薪の山によじ登り何とか難を逃れる始末であつた。やつと犬の声を聞きつけた木村さんがそのうちに出てきてくれ、助かった次第。遭難のことを話し救出の手はずをたのみ、その足でまた岳沢のテントまで取つて返した。

この遭難事件の結末は、一日たつた午後2時か3時ごろ、二人の姿が5・6のコルから疲れた足取りで帰つてくるのが見え、一件落着した。最初の発見者の小林（正）の興奮した声で、我々一同テントから飛び出したことはいうまでもない。何でも、二人はこぶ尾根登攀後、帰路で飛騨側の方へ下降してしまい、一夜岩陰でオカンをしたとのこと。まずは目出度しだつたが、東京で捜索隊まで編成してくれた上級生の方々には本当にご迷惑をかけてしまつた。

第2も、大賀と牛ちゃんが絡む話である。3年生の時の冬山は、燕から大天井へ常念を越え、蝶までの縦走であつた。合宿も大分後半に、私は大賀と牛ちゃんと3人でいつの間にか常念に張られた縦走隊の最前線のテントに送り込まれていた。本隊がボツカに来て燕へ戻つた後、猛烈な吹雪になつてしまつた。それからほぼ1週間、我々3名は本隊からまったく孤立し、常念小屋の前に張つたテントで過ごさねばならなくなつた。

一日中やる仕事は猛吹雪の中数時間置きのテントの除雪ぐらいのもので、あとはじつとテントの中で膝を抱えて鎮座するか、シラフに潜り込むだけという非人間的な生活に追いやられた。食料も燃料も次第に底をつきだし、1日2食にしても心細さもだんだん募つてくれる。そのうち3人では、話題もなくなつくる。牛ちゃんが乾パンで器用に作った将棋などを指しつつ、降り止まぬ雪空を眺めて暮らしたものである。なぜか、大賀が一番元気で意氣軒昂であったことを思い出す。

一週間後やつと晴れ間が見え、本隊と合流できた時は心底ほつとしたものだ。リーダーの渡邊さんが「お前ら、食料がなくなり猛吹雪の中をふらふら戻つてこられるのが怖かつたよ」と、しみじみいつていたのが今でも記

憶に残っている。

いまや、この3人の中で残つたのは私だけである。青春の思い出を共有してくれる友もない。寂しさが募るこの秋である。

大賀の話で忘れる出来ないのが、就職して数年後に起きた鶴見の列車事故の犠牲者になつたことである。見舞いに駆けつけた我々の前で、心配のあまり泣きながら現れたのがその後に伴侶となつた恵子さんであった。我々の目の前で、顔面打撲でお岩さんのようになつた大賀と、固く手を握り合つた可憐な彼女の姿がいまでも瞼に浮かぶ。素晴らしい奥さんに最後まで看取られ人生をまつとうした大賀は幸せ者であつたと思う。大賀の冥福を心より祈つていて。

つかは元気に恢復されるもの信じて陰ながら応援してきました。奥様をはじめご家族の献身的な看病に、そのご苦労を考えると、自然に頭が下がります。今頃は天国で種瀬先生を囲んで中島、ギューチちゃんと一杯やつてゐるのかな。長い間の疲れを癒してください。思えば、大学入学して一年生から同じE組で、山岳部では大賀、仲田、山本（尚）、小生、さらに途中から三股が入つて、ヤロー会を支える力となつて来ました。

君は背が高く、バスケットボールをやつていた為か、余分な脂肪のない筋肉質のスマートな体格をしてカッコよく、君とは正反対の僕には羨ましい限りでした。首を振りながら熱心に話す姿を忘ることは出来ません。山岳部の部誌にJOのサインつきのスマートな文章をみると、フランス語の方が似合うのに何故ドイツ語を選んだのかと思つていました。

ジロチャンへ

永井 新也（昭36年卒）

二郎さん 長い闘病生活、その厳しさ、辛さは我々の想像を超えるものだつたと思いますが、よく頑張つて来ましたね。私は君がい

に行つたことを思い出します。
ご冥福を祈ります。

都会の山仲間

倉知 敬（昭38年卒）

登山を共にする間柄の人には二種類あって、ほとんど山だけでしか付き合わない人と、山にも行くが普段の生活でも濃厚に交流をしてしまう人がいる。大賀さんは私にとつて断然後者の類に入る人だった。若い頃は特にそうで、田舎から出てきて入学したばかりの世間知らずは、格好良い都会人の上級生に畏敬の念を抱いたのだが、その中でも一際洗練されて見える大賀先輩はやさしく田舎者の面倒を見てくれたのであった。

振り返つてみれば、山行を共にしたのは主に若い頃の二〇回そこそこの左程多いほうではないが、一方で例え私は結婚式には司会役をお願いするなどしております、普段から遠慮なく頼みごとを持ち込んで当たり前の親しめる存在であつたわけで、それを大賀さんは自

然に受け止めてくれたのであつた。

そもそも山岳部に入つて早々、谷川岳雪上訓練合宿などで、闊達に振舞う上級生部員たちに物怖じして溶け込めない中、前期合宿に参加し岳沢に出掛けたが、そこで小林（進）、大賀ご両人がコブ尾根登攀の帰路飛騒側に迷い込むという遭難未遂事件を引き起こした。その日戻らない二人が、敢然と極悪の岩場に挑戦した末に空中でビヴァークする図を想像しながら、テントで一夜を明かしたが、結局単に下山路を間違えただけのお粗末な顛末だつたとわかつて、急に身近な存在に変わつたようを感じたものだ。

二人が帰つてこなかつた日の翌朝、遭難救助態勢の中で岳沢小屋主人の上条岳人氏にも支援を頼んだところ、コブ尾根を登つて探してみようということになり、私がお供をする羽目になつた。ザイルを結び合い、夢中でくつついで登つたが、何も辺りに異常ないので、コブを懸垂で下つたところで引き返すことになり、コブ沢の雪渓をグリセードして下つた。今年五月岳人氏は不幸にも事故で亡くなられており、これで相前後して私にとつてコブ尾根の機縁に繋がる人が三人とも居なくなつた。

山岳部時代、印象に残る登山を共にしたという記憶は薄いが、部室やらでお話を交わす機会は人一倍多かつたと思う。学生時代の後

半は腰痛だかの持病で大賀さんは登山もままならなかつたが、山の話は大好きであつた。

登山の共通体験としては、卒業後の一時期何度も谷川岳の週末登山を続けたことが強く記憶に残る。雨に降られたり、目の前で遭難事件があつたり、登らずに帰ることも多く、せいぜい鳥帽子南稜を登つたくらいで大したことは出来なかつたが、その頃は日ごろ飲み屋で会うとか下宿を訪ねるとか、普段の付き合いの延長が週末登山になつていた。

その頃、大賀さんは鶴見列車事故に遭遇して大怪我をした。実は、東京駅でその電車に乗る直前まで、大賀さんは私と二人で八重洲の酒場で長話をしていた。事故の顛末は、ご本人が会報（8号、1964.9）に面白おかしく書かれているが、私は同じ号の会報にヒマラヤ遠征の願望について書いているので、多分その時には遠征の企画が進まないことを私が長々と愚痴つて、大賀さんが慰める役をしていたのだろう。いいかげんに帰ろうや、ということになつたタイミングが、ズバリ不運な電車の発車時刻に合つてしまつたわけだ。

翌朝ニュースで知つて、仰天して生麦の病院に駆けつけたら、同じく駆けつけた石さんと病院の前だからでばつたり会つた。石さんは前述の岳沢の事件の時も深夜テントを出て上

高地に連絡に下るなど面倒を見られたわけであり、何故か死にそこないの時には付き合う運命を共にしている。包帯ぐるぐる巻きでベッドに横臥した大賀さんは、冷静に事故の解説をしてくれたが、まさしく死と紙一重であつたのだ。

その頃、海外遠征の機運が高まつてきたのだが、大賀さんも遠征志願者の一人であり集会の常連であつた。しかし体調不完全だったから参加そのものは端から諦めていた様子であり、そうではあるが協力を惜しまなかつた。遠征実現の前提として派遣母体の針葉樹会の活動充実が課題だつたが、大賀さんは遠征とは切り離した立場で針葉樹会の雑用を担当して、その緻密な性格を發揮して会の正常な運営を支えた。針葉樹会の現実的な成り立ちは、総務を担当する幹事が如何に全体をまとめ活動を促進するかという手腕次第に尽きるので、それは情熱と事務能力がなくては出来ない。歴代の総務幹事の内では、例えば南竹さんという幹事の権化みたいな存在の大先輩がいるが、大賀さんも何人かの名幹事の一人に数えられる貢献者だつたといえよう。

一方、大賀さんは学究派であり、遠征準備の段階で資料の翻訳の役を担う一人だつた。それが嵩じて、後日山岳書の訳本出版に関わることとなり、シプトンの自叙伝『未踏の山

河』の翻訳に実に熱心に取り組んだ。実際に遠征の準備に携わった何人かの共訳であるが、出版の都合もあって中でも最も力を入れた大賀さんと私の共訳という形で出版された。

翻訳に当たっては、原作の名文を生かす言い回しはどうあるべきか、お互いに担当した部分を批判し合い更に推敲を重ねるなど、相当の手間をかけた。また、挿絵のペン画は原著のコピーでは不充分だというので、大賀さんは絵の達者な友人を誘い込み、かつ自分で何枚かを丁寧に書いた。この本は、大した出版部数ではないにしろ、売り切れて絶版となつた。

その後、大賀さんは社業に多忙を極める一方、暇を見てはティルマンの『Mischief Goes South』というヨツトによるアフリカ大陸一周の物語の翻訳を始め、途中まで進んだところで訳稿の写しを私に送ってくれた。シブトンと並ぶ登山家であるティルマンは、歳をとつてからはヒマラヤなど高所はごめんだ、といふので世界中をヨツトで航海し、海岸沿いの未踏の低山を登つたりする探検を長く続け、八冊の航海記を出版した。同書はその内の1冊であり、いずれも訳本は出ていない。当時ロンドン駐在だった小林（進）さんが何冊かを買って私たち二人に送ってくれたのである。いかにも地味な本だし、翻訳出版の引き受

け手を見つける当てもないまま、多忙などのため翻訳は途中で頓挫したままではないかと思う。こういう僻地航海記は日本にないジャンルなので、出せれば意義深かったろう。しかし、ティルマンの文章は難解な表現や故事來歴の引用が多く、翻訳より調査がたいへんで苦労しただろう。私の方は、初めから諦め気分だった。

大賀さんは文筆の方も好きだったが、絵心の方がもつと強かった。前述のペン画挿絵もそうだが、『針葉樹』12号の表紙題字（「樹」の文字の点が欠けているもの）や裏表紙の部章カット、記事ページ挿入のルート図の一部は大賀さんの手による。

絵画は、昔療養のため伊豆山中滞在時に嗜んだと聞くが、引退後1998年秋に同好会仲間による個展を銀座画廊で開き、何枚かの絵を出展された。輪郭のはつきりした素直なタッチで清涼感を抱く絵であった。画廊を訪ねた時、出展作の山の絵の前で二人で並んで撮った写真があるが、大賀さんははにかんだような表情をしている。その写真を郵送してくれた時、同封されてきたメモ書きが手元に残っている。手紙の類いはそれが最後のものであり、当時の状況を思い起こさせるので次に引用したい。

その後、会う機会もない内、肺炎が嵩じて臨終かもと知らせがあつて、上野の三井病院にお見舞いし、何回か病院を訪ねたが、何がしか落ち着いて話し合えたのは結局それが最後の機会だった。退院後、肺炎は感染が怖いという中、奥さん共ども昼食集会や山岳画展などに顔を出されたが、昔のような闊達な会

新年おめでとう。冬山はどうでしたか？（注①）写真が出来たのでお送りします。忙しいのに有難うございました。（注②）早い時期に、T中さん等と、中島文集の打合せをしました。（注③）平尾・加藤の計画とうまく振り分けないといけませんね。（注④）

99.1.5 大賀

（注①）私は実はその前年の舟形山敗退で正月山行は止めにし、出掛けていない。

（注②）個展に来てくれて、という意味。

（注③）中島さん逝去の直後で、遺稿集を出版する手はずになっていた。

（注④）ご両人は大賀さん、中島さんと共に種瀬ゼミ同僚。その仲間が追悼集出版を

計画していた。趣旨が違うので別々に出すこととし、ゼミ仲間は遺稿集の募金活動にも参画してもらうことになつた。

話を楽しむという雰囲気にはならない。

それから長い間集会にお誘いしたりするきっかけに至らないまま、計報に接することになった。そのうち又お元気になつてお付き合いの輪の中に戻つてこられるかも知れない、と思うはかない期待も空しかつた。最後の数年ご無沙汰しましたが、大賀さん、いろいろあつた昔の思い出はいつまでも憶えていますよ。

頭が混乱したままで、原に電話して住所を聞き、ご家族に電話で誘導されて何とか御自宅をお訪ねする事が出来た。仕事の時の厳しさと、私的な時の優しさを思い出させる、安らかなお顔だつた。現実に起こつている事なのか、と違和感を覚えながらも線香を上げさせてもらつた。自分勝手に「少し遅かつたけれど、まあ許してやるか」と言つてもらえたように思つた。

私が山岳部の現役時代には、大賀さんは入

社後2～5年の忙しい時期で、殆ど接触が無かつた。それでも4年生の初夏、就職難の折には、ゼミナールでも後輩である事を口実にして、職場に相談に伺つた。今思えば、私の会社人としての人生が決まつたような訪問だつた。入社試験の役員面接では、大賀さんの父上が同席されていて、助け舟を出して下さつた（大賀さんの父上は現役社長の時に急逝されたが、当時同じ会社に出向していた事もあって、私は末席で葬儀の手伝いをさせて頂いた）。

大賀さんは車が好きだつたし、運転が上手だつた。自家用車で麓までアプローチする登山の先駆けだつた。広河原に車を置いて北岳に、扇沢出合から針の木岳と一緒に登つた。法師温泉から平標山は悪天候に阻まれた。ヒンズークシユ遠征隊の羽毛服・寝袋を受け取りに大賀さんの買つたばかりの新車で大阪を往復した事があつた。東名高速道路の完成する前、交代で運転する夜行日帰りの強行軍だつた。

平川が前穂高で行方不明の報が入つた時も、大賀さんの運転する車で池知を交え一緒に救助に向かつた。中央道も長野道も無い時代で、夜中にひたすら甲州街道から上高地まで走つた（針葉樹会報平川追悼号に大賀さんが詳しく書かれている）。

の事務的な冷たい答えだつた。やつとの事で拾つて貰つた就職でもあつたので、遠征参加は諦めざるを得なかつた。

職場は同じだつたが、大賀さんはメキシコに、私は米国・欧洲に駐在した時期があり、職場での直接の接点は多くはなかつた。しかし、公私にわたり要所要所で貴重な指導・支援を頂いた。若氣の至りで転職を考えた時、帰国した子供達の順化に悩んで居た時、先輩の親身の助言は有り難かつた。

大賀さんは車が好きだつたし、運転が上手だつた。自家用車で麓までアプローチする登山の先駆けだつた。広河原に車を置いて北岳に、扇沢出合から針の木岳と一緒に登つた。法師温泉から平標山は悪天候に阻まれた。ヒンズーケシユ遠征隊の羽毛服・寝袋を受け取りに大賀さんの買つたばかりの新車で大阪を往復した事があつた。東名高速道路の完成する前、交代で運転する夜行日帰りの強行軍だつた。

平川が前穂高で行方不明の報が入つた時も、大賀さんの運転する車で池知を交え一緒に救助に向かつた。中央道も長野道も無い時代で、夜中にひたすら甲州街道から上高地まで走つた（針葉樹会報平川追悼号に大賀さん

が詳しく書かれている）。

就職が決まり、大賀さんの言われるままに希望配属先を記入した。後に配属された先の上司から「大賀の仕業だな」と見破られた。

入社直後にヒンズーケシユ遠征が実現する事になつた。大賀さんにも助けて頂いて会社に掛け合つたが、会社からは「辞めて行けば」を知らされた。

直接お話を最後の機会は、2003年12月の事だった。仕事で米国に駐在中に電話で近況を報告させて頂いた。「一緒に山登りしていた同期の連中の名前も思い出せない時があるんだ。情け無いよな」「単身赴任だろうけど身体に気を付けるよな。家族を大事にしろよ」。ままならない病氣と闘いながら、御家族を労わる心と後輩を気遣う優しさが伝わって来た。

振り返ると、私の人生観と言うよりも人生そのものに対する大賀さんの影響と存在の大さを改めて痛感する。同時に、何も恩返しが出来なかつた悔いの念にかられる。今はただ、千の風になつてカラコルム・アンデス・ヒマラヤ等々を思う存分堪能されるようお祈りする。

大賀さんを偲んで

原 博貞（昭41年卒）

大賀さんはもう長い間、なんとなく気が引けて気軽に話が出来なくなつていた。無論

私が悪いので、申し訳ないという気持ちが先行してまともに話が出来ず、悪循環になつていた。何が悪いかと言えば、大賀さんに誘つて貰つて入つた日産自動車をわずか1年で一方的に退社し、ヒンズーケシユ遠征に参加してしまつたからである。

大賀さんの社内の立場は苦しかつたろうと思うと、情けない事にいよいよ顔が下を向いてしまう。ただゴメンナサイと言うのではなく、もっと腹を割つて話をすべきだと、思つてはいたが、その機会を作らないまま、ついにお別れとなつてしまつた。焼香しつつ大賀さんの写真に又、ゴメンナサイを繰り返す事になつてしまつた。愚痴つてばかりいないで、大賀さんと楽しんだ秋のある登攀をアルバムを開いて思い出そう。

アルバムの大賀さんはヘルメットに黒い長ズボン、靴は双葉であろうか、ごつく重そくなやつ、腰には進駐軍放出の安全ベルトで付属のロープが肩から斜めにかかつている（戦争映画で敵中崖を登つて進入するレインジャードがつけているやつ）。精悍な笑いを浮かべている。

日産に入つて半年、週末に谷川・一ノ倉沢に行かないかと大賀さんに誘われ、「そうですね、鳥帽子の奥壁にでも行きますか」と例の夜行の鈍行で出かけたものだ。当時大賀さ

んは鶴見の大事故で大怪我をして回復したばかりで、まだ身体に自信が無く、連れて行つてよというニュアンスだったが、しかし出来たら有名な壁に行きたいという気持ちがありだつた。

鳥帽子奥壁変型チムニー・ルートといえば、今では易しいポピュラー・ルートだろうが当時はクラッシックな大きなルートの一つだつたのだろう、大賀さんは嬉しそうだつた。テール・リッジをとことこ登り、見ると大賀さんはトレーニングを積んだのか身体は軽そうだつた。アンザイレンして「つるべで行きますか？」と聞くと「暫くトップをやつてくれ。でもどこかでトップをやらせてくれ」と大賀さんらしくもない遠慮勝ちな言葉。やはりブランクが心配だつたのだろう。

変型チムニーを抜けるまで私がトップをつとめ、「さあ、ここからトップをお願いします」と言うと、例のはにかむ様な笑顔で「丈夫かなあ」と言いつつトップに立つた。右にトラバースする地点でブランクのためか、ちよつとぎこちなく迷つていたが、すぐに勘が戻つたらしく、順調にザイルを伸ばしていった。3ピッチ程で終了点となり握手、まだ日は頭の上で快調なクライムだつた。稜線まで登るのは面倒なので「南稜を下りましようよ」と提案すると、「そうか、ヴァリ

エーションの連続だな」ととても喜ばれた。

下降は2回のアップザイレンがあつただけでコンテですたこら下り、秋の快晴の登攀は楽しく終了した。私の時代には南稜は下降路として定着していたが、大賀さんの時代にはまだ登攀ルートの一つだったので、殊のほか喜ばれた。

私が1年の時の滝谷遭難の反省会で舌鋒銳く学生を批判する大賀さんを見て怖い先輩だなあと印象が強かつたのだが、この日の大賀さんは子供のように登攀を楽しみ、はしゃいでいた。

ちよつと意外だなあという印象が強かつた。

大賀さんのお宅によばれた時だつたか、大

賀さんの会社への姿勢が私の目にはあまりにもべつたりに見え、そう言つた時に「当たり前じやないか、日産3万人の運命が俺達の肩にかかるつているんだぞ」と言われ、驚いた事を覚えている。斜めに物を見る私と違い、大賀さんははあくまでストレイトな人だつた。

失礼など誤解される事を覚悟で言わせて貰えば、純情と言つて良いまつすぐな方だつた。

それが私をたじろがせ、なかなか話をする機会を作らせない事になつたのだろうし（弁解ですけど）、あの無邪気な喜びを鳥帽子奥壁で見せる所でもあつたのでしよう。今は合掌のみです。

平成18年度 針葉樹会総会報告

平成18年6月27日
於 如水会館

平成17年度活動報告

△懇親山行

①秋季懇親登山 11月12日（有明山ほか）

今回は有明山登山と蓼科アダージオでの参集をメインとした。前日の夜に、三井、倉知、高橋（信）、西牟田、金子、兵藤、佐藤（活）、神野、川名、近藤の10名が大町温泉郷のエコノミスト村ゲストハウスに集合した（前神は大町のホテル泊）。中島さんの別荘に参集して中島夫人と夕食を共にした。

翌12日は、中房温泉コースと松川コースに分かれ、有明山を目指すも、松川隊は道を失い早々に退散した。中房隊は全員登頂。アダジオに到着していた石井、佐薙、竹中を加え、総勢12名（アダージオ亭主・松尾も含め）でにぎやかに宴会。

13日は絶好の登山日和のなか、蓼科山、西天狗、木曽駒・宝剣岳へと分散登山。

②冬季懇親ハイキング 2月18日（大野山）

中川孫一さん遭難の山、丹沢山塊の大野山へ。参加者は、石井、山崎、佐薙、高崎（治）、山本（健）、山本（尚）、高橋（信）、竹中、蛭川、本間、中村（雅）、西牟田、前神、佐藤（活）、蛭川、本間、中村（雅）、西牟田、前神、佐藤（活）、

近藤の15名。頂上で幹事心づくしの豚汁で昼食、記念撮影をして谷峨駅に下山。上り下りとも1時間15分とほぼコースタイム通り。晴れていれば富士の眺望が素晴らしい山だが、丹沢湖や丹沢の山並みを垣間見ながらのままずのハイキング日和だった。下山後、新松田駅前の中澤酒造に寄り、新酒を試飲・購入してから駅前の焼肉・蕎麦屋で打ち上げ。

△会合

①幹事会 17年6月6日

②評議員会 17年6月16日（評議員10名、学生1名。於如水会館）

③総会 17年6月27日（会員31名、学生1名。如水会館）

④新年会 18年1月25日（会員36名、学生1名。如水会館。中村保氏によるスライド上映「東チベット秘境を行く」）

⑤三月会の会合をほぼ毎月開催した。

△刊行物

①針葉樹会報

104号（17年6月発行）
105号（17年10月発行）

106号（18年3月発行）

②針葉樹会報バツクナンバー合本

戦後復刊15100号3分冊を如水会館

書室、日本山岳会、国立部室にそれぞれ献本。

平成18年度活動計画

△懇親山行

今年度も晚秋にアダージオを拠点にした分散登山と早春に関東周辺の低山ハイキングの予定。

△会合

①幹事会	6月13日
②評議会	6月20日
③総会	6月27日
④新年会	19年1月
⑤二月会 (8月は休会)	

▼刊行物

針葉樹会報 107号 18年6月(既刊)
同 108号
19年1月

(注)コストを下げて年3号を維持するよう努力する)

△会長		竹中 彰 (昭39)	新任
△評議員		(西牟田伸一 退任)	
副会長	三井 博 (昭37)	留任	
小林 茂雄 (昭19)	留任	石井左右平 (昭23)	留任
佐薙 恭脩 (昭31)	留任	山本健一郎 (昭32)	留任
中村 保 (昭33)	留任	西牟田伸一 (昭43)	留任
中村 雅明 (昭33)	留任	井草 長雄 (昭48)	留任
前神 直樹 (昭51)	新任	前神 直樹 (昭47)	留任
近藤 泰 (昭53)	留任	西牟田伸一 (昭47)	新任
白石 章治 (昭51)	留任	井草 長雄 (昭48)	留任
古田 茂 (昭51)	留任	前神 直樹 (昭51)	新任
△幹事		中村 雅明 (昭43)	留任
代表幹事	前神 直樹	中村 保 (昭33)	留任
総務幹事	(兵藤 元史 退任)	中村 雅明 (昭43)	留任
会計幹事	松田 重明 (昭53)	西牟田伸一 (昭47)	新任
有賀 長雄 (昭36)	古瀬 泰介 (昭55)	井草 長雄 (昭48)	留任
井草 盈 (昭36)	篤弘 茂 (昭55)	前神 直樹 (昭51)	新任
会報幹事	新任	古瀬 泰介 (昭55)	留任

山行幹事	蛭川 隆夫	(昭39)	川名 真理	(昭62)
本間 浩	(昭40)	大谷 公重	(平10)	留任
金子 晴彦	(昭46)	兵藤 元史	(昭52)	新任
竹中 彰、近藤 泰	宗像 充	(平11)	山田 秀明	(平15)
退任	留任	留任	留任	留任
学生幹事				
▽監事				
渡辺 嘉佑	(昭35)			
中村 雅明				
▽新入会員				
福田 孟	(昭33)			
▽逝去				
春日井 実	平成17年8月31日			
横山 皖一	平成18年5月29日			
大賀 二郎	平成18年7月18日			
渡辺 嘉祐	平成18年10月28日			
病死	病死			
病死	病死			
病死	病死			

針葉樹会平成 17 年度 一般会計決算

(平成 17 年 6 月 1 日～平成 18 年 5 月 31 日)

支出			収入		
項目	実績	予算	項目	実績	予算
会報発行費	482,820	450,000	前年度繰越	60,408	60,408
山岳部補助	12,000	100,000	納入会費	531,000	500,000
通信連絡費	78,181	40,000	会合余剰金	102,734	10,000
慶弔費	15,855	30,000	郵便貯金利子	5	30
学生保険補助	0	20,400	遭難対策基金より入 金(日本山岳会百周年 事業募金分)	100,000	100,000
会報バックナンバー 合本費	179,685	20,000	遭難対策基金より入 金(当年度立替分)	53,230	0
遭難対策基金支出分 立替	53,230	0	会報バックナンバー 合本費見合い	179,685	0
次年度への繰越	205,291	10,038			
合計	1,027,062	670,438	合計	1,027,062	670,438

針葉樹会平成 17 年度 遭難対策基金決算

(平成 17 年 6 月 1 日～平成 18 年 5 月 31 日)

支出			収入		
項目	実績	予算	項目	実績	予算
学生保険補助	0	20,400	前年度繰越	4,268,072	4,268,072
一般会計への支出 (日本山岳会百周年 事業募金分)	100,000	100,000	うち遭難対策基金	3,368,072	3,368,072
当年度一般会計立替 分	53,230	0	うち遠征基金	900,000	900,000
会報バックナンバー 合本費	179,685	0	一般会計より(学生 保険補助)	0	20,400
次年度繰越	3,937,857	4,170,072	利息他	2,700	2,000
うち遭難対策基金	3,037,857	3,270,072			
うち遠征基金	900,000	900,000			
合計	4,270,772	4,290,472	合計	4,270,772	4,290,472

針葉樹会平成 18 年度 一般会計予算

(平成 18 年 6 月 1 日～平成 19 年 5 月 31 日)

支出			収入		
項目	金額	前期実績	項目	金額	前期実績
会報発行費	400,000	482,820	前年度繰越	205,291	60,408
山岳部補助	74,000	12,000	納入会費	530,000	531,000
通信連絡費	60,000	78,181	会合余剰金	10,000	102,734
慶弔費	30,000	15,855	郵便貯金利子	5	5
学生保険補助	20,400	0	遭難対策基金より入 金(日本山岳会百周年 事業募金分)	0	100,000
会報バックナンバー 合本費	0	179,685	遭難対策基金より入 金(当年度立替分)	0	53,230
遭難対策基金支出分 立替	0	53,230	会報バックナンバー 合本費見合い	0	179,685
次年度への繰越	160,896	205,291			
合計	745,296	1,027,062	合計	745,296	1,027,062

針葉樹会平成 18 年度 遭難対策基金予算

(平成 18 年 6 月 1 日～平成 19 年 5 月 31 日)

支出			収入		
項目	金額	前期実績	項目	金額	前期実績
学生保険補助	20,400	0	前年度繰越	3,937,857	4,268,072
一般会計への支出 (日本山岳会百周年 事業募金分)	0	100,000	うち遭難対策基金	3,037,857	3,368,072
一般会計立替分	0	53,230	うち遠征基金	900,000	900,000
会報バックナンバー 合本費		179,685	一般会計より(学生 保険補助)	20,400	0
次年度繰越	3,938,857	3,937,857	利息他	1,000	2,700
うち遭難対策基金	3,038,857	3,037,857			
うち遠征基金	900,000	900,000			
合計	3,938,857	4,270,772	合計	3,938,857	4,270,772

針葉樹会会長就任にあたつて

竹中
彰（昭39年卒）

この度、針葉樹会評議員会のご推举と総会の決議により会長に就任することになりました。最初にお話を頂いた時には、果たして私が適任であるかどうか、更にはこの針葉樹会にとつて私が会長に就くことの意味があるか等、色々の考えが浮かんできました。

ただこの数年来、山行幹事として何がしか針葉樹会の運営に関わり、また毎月の三月会に出来るだけ出席し、お酒や、諸先輩との情報交換など楽しませて頂いていることから、簡単にはお断りできないなどの思いも浮かび、加えてこの3月末で国際大学を最後に勤めも辞め、今後は従来からの如水会監事、5月からの日本山岳会監事などボランティアベースの奉仕と仲間との山行の充実を期していた身としては、積極的にお断りできる理由が少ないとのことと、石原評議員会長以下諸兄姉が全面的にバツクアップするとのお言葉なども頂き、この際は現役時代から世話になってきた針葉樹会にその何分の一かでも恩返しできるならばとの心情もあり、お引き受けすることを決心致しました。

責を、経験や対外的ネットワークも持たないこの身に勤まるのか、極めて不安なところであります。従いまして、本日の総会に出席頂いている諸先輩、後輩の皆さんのがんばりに感謝的活動への参加とご支援、ご指導をお願い致します。

未だ今後の活動についての方針も具体的には纏まりませんが、従来の会報発行、懇親会企画、会費納入率向上に努めるほか、

①最大の問題である当針葉樹会の母体であるべき現役山岳部の復活に向けて針葉樹会としてどの様なことが出来るか

②針葉樹会を会員の為に活性化する方策は（会員は針葉樹会に何を望むか）、及び、より多くの若手（中堅）層の活動への参加の為に何が必要か

③山岳部創立90周年をどう考えるか、準備作業を何時からどの様な形でスタートするか

④昨年秋以 H U H A C メーリングリストでも幾つか情報交換メールが流れた、懐かしい歌集をどう纏めるか等について何らかの方向付けが出来ればと考えています。

以上の様なことも含めて、今後の会運営について会員各位の積極的な意見をお聞かせ頂きたく、宜しくお願ひ致します。

三月会通信

■5月15日■

〔出席者〕 石井左右平 山崎擴 佐薙恭 高
崎治郎 山本健一郎 渡辺嘉佑 中川滋夫
倉知敬 三井博 高橋信成 蝶川隆夫 本
間浩 小島和人 竹中彰（記録）

●山行報告

石井・山崎 4月20日 中山道 5月10日

11日 天城山縱走、長九郎山（佐薙、高崎、

蛭川、本間

佐薙
4月18日 三の塔、搭力岳、小丸
4

月 28 日 丹沢・権現岳(本間)

高嶺 5月10日 天城 ほかに三頭山

渡辺 2月 高杖高原スキー場 3月 藏王ス

4月29日 高尾・城山

中川 5月3日 大山《》曰向薬師

三井 4月2日 愛鷹連峰（位臘岳）愛鷹

五月廿日
名急山、妙義山（紅梅院）

馬場一七日

高橋 4月27日 白馬村周辺でサゼンソウ
を鑑賞（現在は田舎町の花）

を鑑賞（現在廿日名因の花作は教室に通じてゐる）

蛭川 4月19日 太刀岡山（山梨百名山の

蛭川 4月19日 太刀岡山（山梨百名山の

一、茅が岳の横／竹中、小野他／山梨の桜等見物も)

5月10～11日 天城・長九郎（右記参照）

竹中 4月19日 太刀岡山（右記参照）

本間 4月28日 丹沢・権現山（佐薙さんと。

中川温泉へ下る） 5月10～11日 天城・長九郎

小島 5月4日 大山（好天の中ケーブル使つて。家内と）

●三月会こぼれ話 上高地三題 山本 健一郎

一、逆さに見えた上高地

河童橋の辺り、奥穂から前穂にかけての稜線が見えてくるとわたしの目は自然、最低鞍部のやや前穂よりの目立たないある岩峰に吸い寄せられる。わたしの墓場になつたかも知れないあのピーク、恥を晒すようで今まで喋つたことがないあの日の出来事を書いてみよう。

3月のある日、前穂北尾根三・四のコルの雪洞に五晩を過ごした甘利仁朗さんとわたしは前穂にテントを上げ、北穂を往復する計画を断念、奥穂アタックに出かけた。前日のルート工作のおかげで三峰も難なく通過、快晴の

奥穂に登り、意気揚々とこれで合宿も終わりと帰路についた。

吊尾根の岳沢側に刻まれた夏道は雪に埋もれ五十度くらいの雪壁になつていて、谷側の端だけ岩が出ていた。朝の踏み跡どおり甘利さんに続いて、山側を向いて横ばいに足を運んでいたら、蹴りこんだ右のステップがすつと崩れた。

慌てて左足で踏みとどまろうとしたが、全体重がかかつた左のステップも抜けてしまった。一日陽の光を浴びていた南斜面、もう少し気をつけなくてはと思ったが後の祭り、山側を向いた姿勢で十五センチくらい滑り落ち、両足のアイゼンが夏道の外縁に引掛かり、あお向けに頭を下に岳沢を向いた姿勢で空中に投げ出された。この時逆さに見えた上高地、どうしたことか一瞬左右逆じやないかと思ったのを覚えている。よほどわたしの脳味噌も慌てたらしい。

すぐに頭を下にあお向けのまま雪混じりの岩場にぶつかり、ピッケルを両手で持つて胸の前に構えていたので両肘を激しく打つた。あとで気がついたが、ヤツケは両肘とも破れていた。次はもつと長い滞空時間の後、岩場にぶつかったが、急な斜面なのでそれ

まりショックもなく着陸して停まった。何が何だか分からず空しか見えない。動けるので恐る恐る上半身を起こして見たら、頭を奥穂に向か水平に緩んだ雪の中に深く埋まっていた。六十センチくらい深い穴から這い出たら、帽子に引掛かっていたゴーグルが岳沢の方に転がっていくので飛び付いて拾つた。なんだ動けるぞ、何とか甘利さんと合流しなければいけないと気がついた。今落ちてきた岩壁は高さ約四十米、登りかえせそうもない。前穂寄りの雪の斜面を登らなくてはと思つていてうちに、甘利さんが金切声をあげわたしの名を呼びながら駆降りてきてくれた。おーいと手を振つたら甘利さんは幽霊を見ているような目付きで、お前立てるのかと聞く。この穴のおかげで何ともありませんといつたら、甘利さんの方が気が揺るみ腰を下ろしてしまつた。こういう時は氣を落ち着けましょうと、テルモスを出したら奇跡的に割れていなし。当時はガラス製、少しのショックでよく割れたのに中身が少なかつたせいか無事だった。残りの紅茶を二人で分けて飲み、吊尾根に登りかえした。

三峰の上から三・四のコルにいるサポートの佐薙、中村保パティに奥穂登頂を報告、雪洞の荷物を撤収して先に降りるよう頼み、コルについてのが午後六時、ヘッドライトの

光で四峰を越えたが、足元しか見えないのでガスの日と同じように高度感が感じられず、簡単に通過した。五・六のコルのテントに帰り着いたのは午後八時、夕食もそこそこに寝袋に潜り込んだ。

ところが疲れきつて寝ているわたしの隣で、甘利さんが何度も奇声をあげて飛び起きるので、うるさくて仕方がない。何度目かに堪り兼ねてうるさいと文句をいつたら、お前が空をきつて落ちていく夢を見て、目が覚めるのだ、文句をいうなど逆に叱られ、返す言葉がなかつた。

二、あの場所

明神から上高地への途中、六百山の裾にかけて平地が広がり、落葉松や岳樺の林が広がっているところがある。そこが忘れられない上高地の或るスポットだ。木村さんのところに番頭格の二人、青白い瘦せた「チヨーさん」と小太りで赤ら顔の「クレさん」がいた。外の仕事を仕切っていた「クレさん」が「六尺に六尺に六尺はいるじ」と言つてゐるのを小耳に挟んだが何のことだか分からない。そつと聞いて見たら「おろくを一つ焼くにそれだけの薪がいるじ」とのこと、それを聞いてドキッとした。丁度涸沢で事故があり、遺体を横尾まで担ぎ下ろし、それからリヤカー

で運んでいると聞かされたばかりだつた。どうしてそう呼ぶようになつたかは知らないが「おろく」とは遭難者の遺体のことである。午後になって木村さんから一橋の衆も済まんが手伝つてくれと言われ、荷物を担いで「クレさん」たちの後についてあそこまで行つた。林の中にはすでに六尺の丸太が縦横交互にわたしの背より高く積み上げられ、その上に遺体を乗せて灯油をかけ点火するばかりになつていた。

わたしは間もなく木村さんのところに引き返したが、木村さんのところの人達は一升瓶を抱え、現場で徹夜するらしかつた。翌朝また朝飯などを頼まれて運んでいたら、積み上げた薪はもうすっかり燃え尽きていたが、まだ真っ赤な熾が残りお骨をあげられるようになるのは昼ごろ、ご遺族を案内するのは午後だとか話していた。当時ヘリコプターなどは使えず、遺体を町の火葬場まで運ぶのも大変なので、このようなやり方を取つていたのだろう。

それからは下山の途中、あの辺りで暗くなると何となく氣味が悪く、つい足早に通り過ぎるようになつた。

三、上高地の銭湯

冬と春の穂高での合宿の帰り、上高地から釜トンネルを抜けてバスのある沢渡まで四時間は歩かねばならない。そこで坂巻温泉に泊まり汗を流して、翌日下山することもあつた。坂巻温泉は今と違い、旧道の対岸に崖にへばり付くように建てられ、専用の釣り橋で渡つていつた。百軒長屋という崩壊地、日本一短い清水トンネルなどまだ残つてゐるのだろうか。清水トンネルは湧水が多く、冬は太い氷柱が立ち並びピックルで氷柱を壊して通つたりした。

木村さんのところにいたチヨーさん、クレさんの二人、炊事のおばさんなどもうみなあの世に行つてしまつたのだろうか。夕方山を降りて今晚お願いしますと木村さんのところに行くと、「チヨーさん」が、無事帰つてきたなどという顔をして人数を数え、外に立て掛けたある釣竿を取つて田代池の方に降りていく。そして三十分もしないうちに、人数分の岩魚が入つたビクを下げて戻つてくる。今時そんなことをすれば大問題だが、そういう良き時代のことである。

ある時昼ごろ降りてきて、坂巻迄のすかここに泊まるかもめたことがある。風呂に入りたい奴は頑張ろうというが、動きたくない奴もいる。われわれの話を聞いていたチヨーさんがニヤリとして、はあ、上高地にも温泉があるじという。風呂に入れるのかときいたら

後で連れて行つてくれるという。そうなれば上高地に泊まり、明日沢渡まで降りようと決まつた。やがて風呂に行くからと声が掛かり、後をついていくと、下流の橋で向こうに渡り、温泉ホテルと清水屋の前の広場でここだという。裏手に泉源のコンクリートのタンクがあり、ここに入れという。程よい湯加減でかなりの人が入れるが、背が立たないので回りのコンクリート壁につかまつていなくてはならない。

みんな大喜びで、三月というのに風もなくよい天気で日が差しているのを幸いと、ホテルの前の広場で甲羅干しをしてはまた風呂に入り楽しく遊んだ。この風呂には一度しか入つたことがないが、楽しい思い出である。

■6月12日■

〔出席者〕 石井左右平 山崎廣 佐薙恭 三
井博 蛭川隆夫 竹中彰（記録）

●山行報告

石井 5月25～26日 八ヶ岳（編笠、権現）

夏の塩見岳に備えて同行予定メンバーと共にqualificationの山行を行つたが、めでたくqualifiedされた（山崎、佐薙、本間）

山崎 5月25～26日 八ヶ岳（右記参照）
佐薙 5月23日 御殿山（千葉）登り1時間。

5月25～26日 八ヶ岳（右記参照）

6月2 丹沢（小丸・搭・政次郎尾根）春
日井さんの追悼登山その1。

三井 5月28～29日 小秀山、奥三界岳（小秀山は雨の中急登が続く、奥三界岳は曇りの中、林道歩きが長かった）

蛭川 6月27～30日 二ツ森、白神岳（高校時代の友人等と、残雪の中に見事なブナの新緑。ついでに三内丸山遺跡を見学）

本間 5月25～26日 八ヶ岳（右記参照）。

岩有り、雪有り、土の道有りの残雪期八ヶ岳の楽しさ！

5月30日 高尾山（夫婦で、高尾城山甘利ルートの下見）

竹中 5月25～26日 奥穂高岳（岳沢・扇沢）倉知さんと残雪期の奥穂高岳へ。岳沢ヒュッテが今冬の雪崩で壊滅状態の為、快晴の下で上高地から穂高岳山荘まで14時間のアルバイト。翌日は雪の涸沢経由下山、本谷橋でアイゼンを外す。

●その他の話題

・9月のニペソツ計画について

参加メンバーが15名と多いが、総リーダー

三井、リーダー小野、サブリーダー竹中、事務局長蛭川とし、事前準備、現地行動に遗漏がないように。
・体力維持について
石井さんがジムに通うことや、佐薙さんが丹沢の小丸、三の搭、搭ヶ岳を体力測定コースとして歩き、下つて大倉バス停のそば屋で一杯など。
・佐薙さんから北アルプスに日本300名山が32座あるとの情報。
・登山時の衣類について
中川孫さんは夏でもウール製品と聞いている（三井）。今や乾きやすさ等からポリエステルが一般的（佐薙）。常用しているのはポリエスチル＋コットン（山崎）

●三月会こぼれ話

ロイさんとタンノイのスピーカー

（11月の続き） 山本 健一郎

シンガポールのわが家に数日滞在したロイさん、ロンドンに帰る日になつて改まつた顔で「貴兄には大変世話になつた。お礼に何か出来ることがあつたら遠慮なく言え」という。そこでわたしは「タンノイ」というスピーカーは幾らぐらいするのか調べて欲しいと、とんでもないことを口走つてしまつた。ボンドの

シリーズで、どこかの空港に着いたボンドを空港のスピーカーが「ミスター・ボンド、カウンターにお出でください」と Tannoy すると いう表現に出会つたことも記憶にあつたかららしい。オーディオファンの中に根強い信奉者の居るこのスピーカー、ワグナー協会の会員で、毎年バイロイト音楽祭にロンドンから出向くと言つていたロイさん、あれはいいスピーカーだ、すぐ調べて連絡すると言つてくれた。数日してカタログが届いた。五味康祐邸にある最高級モデルは高嶺の花だが、量産モデルには何とか手が届く。懷具合と日本のわが家の大きさを考え、バークレーと言うモデルを頼むとロイさんに連絡した。ところがなかなか届かない。そのうちロイさんの方が心配してまだ届かないか聞いてきた。まだと答えたから慌てて頼んだ店に聞いてくれたがこれが何と発送漏れと判明。プライド高いロイさんから、英國病がここまで蔓延しているとは英國人として恥ずかしいとの手紙が舞い込んだのには笑つてしまつた。

それから3週間ばかりして船会社から知らせがありタンノイのスピーカーは無事到着した。取りあえず梱包を解いて居間に飾つたが、これに見合うアンプ、プレーヤーを買うには軍資金が心細い。しばらくそのままにしておいたら通いの女中がこの箱は何だと聞く。ス

ピーカーだといつたら木目が綺麗だと感想を言う。女中に馬鹿にされてはと、部品の物色をはじめたが、香港ならこの分野でも世界の一級品がズラッとあるのにシンガポールでは品揃えが不足している。

それでも何とかまずまずのアンプとプレーヤーを手に入れて、良い音ができるようになつたので、有志を集めて週末にコンサートを開いた。ろくな音楽が聞けない国でのコンサートは好評で、毎週楽しみにしてくれる人が増えてきた。

そうなるとレコードを仕入れなくてはならない。当時シンガポールにレコード屋はただ一軒、オーチャード通りにあるその名も厳めしいベートーベンしかなかつた。青目の駐在員の客が多く、品揃えが豊富で関税がないので日本より大分安かつた。

かなり恰幅のよいおばさんと綺麗な娘が店番していたが、顔なじみになると黙つて2割引いてくれるようになつた。常連でない観光客がいる時は待てと目配せしてくれて、一見の客がいなくなつてから勘定をしてくれる。中国人の商法はこういうものかと学んだが、やはり馴染みになつた釣道具屋でも同じ体験をした。

ところでこの店で大恥かいたことがある。ある日曜日バツハの平均律クラビア集を聞こ

うと財布をもつて出かけたが、ニコニコと出てきた女主人に今日は何がお望みかと聞かれ、言葉が出ない。平均律を英語でなんと言えばよいのか分からぬ。その場でバツハのピアノ曲の辺りを探せばよかつたのに、慌てたわたしは近くの日本人クラブの図書室に行き、ある言葉を頭に刻み込んでレコード屋に戻り、女主人に笑われた。

無伴奏という言葉だつて普通は un-accompaniedだけれどバツハの無伴奏チエロ組曲は solo という言葉が使われているのを御存じかな。

■7月19日■

【出席者】 石井左右平 佐薙恭 上原利夫

有賀盈 山本尚禎 三井博 高橋信成 蝶

川隆夫 竹中彰 本間浩 高崎俊平

*ヤロー会（昭和36年卒）の大賀二郎さんが前日夕刻に逝去されたことなどもあって、日産自動車での大賀さんの後輩の高崎さんが大賀さんの葬儀関係の日程連絡を兼ねて初めての出席となつた。

●山行報告

佐薙 7月8日　丹沢（山伏峠、菰釣山、城ヶ尾峠、浅瀬）「野鳥の会」のプランに参加。

虫が一杯、長い林道歩き。

山本（尚） 7月14日 櫛形山（アヤメは満開なれど、鹿の食害で数量は減っている。トリカブトの花の方が多い感）

三井 7月2～3日 ニセコアンヌプリ（往復3時間、花が綺麗でした）羊蹄山（往復10時間、標高差1500m以上あり、結構な山であった。ここもシラネアオイ等が沢山。9合目以上は強風が吹き付け、吹き飛ばされそうだった。）

高橋 6月28日 大山（追分から頂上・展望

台往復）下山後「元滝」で風呂に入り、ビールを飲む。8月の白馬～白馬鑓に備えての足馴し。

蛭川 6月14～15日 入笠山（高校山岳部時代の岳友の追悼山行）

6月24～25日 黒姫山（日立川崎工場の現場の人たちとOB山行）

6月28～29日 凤凰三山（左記参照）

7月7～9日 至仏、燧、会津駒（左記参照）

竹中 6月28～29日 凤凰三山（ドンドコ沢～夜叉神峠）小野、蛭川、本間。天気に恵まれ、甲斐駒、白根三山を始めとする絶景を楽しむ。下山後は「秘湯の会」会員の桃の木温泉に宿泊。

7月7～9日 至仏、燧、会津駒（小野、

蛭川ファミリー、本間）

本間 6月14日 高尾山（高尾・城山・甘利

ルート）景信山から下り、裏高尾に登る。

6月28～29日 凤凰三山（右記参照）

7月7～9日 至仏、燧（右記参照）
日光白根山（右記メンバーと燧岳山頂で別れ、大清水へ。翌日日光白根へ。しかし、午前中雨がすごく、引き返す）

高崎 6月24日 上高地岳沢（岳沢小屋の手前まで。壊滅状態の小屋の様子に驚く）

●その他の話題

・大賀さんを偲ぶ。学生時代の事蹟（剣南壁、滝谷グレポンなど）、ルート図作成に才能あり、針葉樹のカットも、また就職後には国鉄の鶴見事故にも遭遇など。

・昭文社の地図上のコースタイムの妥当性について。

・最近は山道具も、ハーネス、ザイル、ヘルメット等が常識化。

・来年の踏査会有志によるニュージーラン

ド・ミルフォードトラックに関連して、経験者の先輩からマルボロ地方のワインを勧められ、装備には小屋で履く内履きをとのアドバイスもあった。

・旅行会社が募集する山行に関して、三井さん

が愛顧の毎日旅行はランクが一番高い、サンケイは入門クラスが多い様だ。

・三月会の由来について（元々堀岡先輩の「昔

は月に一回は集まっていた」との話をきっかけに、山本（健）さんの企画で誕生。

・佐薙さんから「針葉樹会を名乗るからには、会員は針葉樹の樹種について垂直的な変化をきちんと判別出来るようにならねば：」との発言もありました。

■9月20日 ■

【出席者】 石井左右平 山崎擴 佐薙恭 三

井博 高橋信成 本間浩

●山行報告

石井 8月7日 大山（山崎・佐薙・本間）
この夏の塩見岳の為のトレーニング。

山崎 8月中に上記以外にも大山へ。

9月15日 富士山（但し5合目～3合目へ地質学グループと）

佐薙 8月12～14日 越後駒・中ノ岳（三

井・竹中・本間・川名）悪路でアップダウ

ンの多いナカナカの縦走でした。バテました。ゴキに恵まれた（本間談）好山行でした。便利な島倉林道利用。

9月15～18日 ニペソツ・黒岳・当麻乗

越（佐薙・上原・丸山・渡辺・山本（尚）・

三井・蛭川・竹中・小野・小島・佐藤（久）・

原・川名）ナキウサギ・シマリス・ホシガ

ラスを見た。天狗岳から見たニペソツは立派でした黒岳は大勢の人がいたが、大展望

を楽しむ。当麻乗越は登り3時間、下り2.5時

間思つたよりも素晴らしい湿原で、旭岳が真正面に見えた。

三井 8月12～14日 越後駒・中ノ岳（右記参照）

8月28～29日 八甲田山・八幡平（遠藤他2名）

8月15～18日 ニペソツ他（右記参照）

高橋 8月1～5日 白馬・杓子・白馬鑓ヶ岳（小野他2名）

蛭川 8月24～26日 妙高・火打山（妻・義弟）

8月15～18日 ニペソツ他（右記参照）

8月20～21日 ニセコアンヌプリ・イワオヌプリ（竹中、小野他1名）

蛭川 8月24～26日 妙高・火打山（妻・義弟）
8月15～18日 ニペソツ他（右記参照）
8月20～21日 ニセコアンヌプリ・イワオヌプリ（竹中、小野他1名）
8月20～21日 ニセコアンヌプリ・イワオヌプリ（竹中、小野他1名）
8月20～21日 ニセコアンヌプリ・イワオヌプリ（竹中、小野他1名）

本間 8月4～5日 仙丈ヶ岳・甲斐駒（55歳の友人と）体調不良で共に頂上踏めず、些

か心配。

8月7日 大山（右記参照）

8月12～14日 越後駒・中ノ岳（右記参照）

8月21～24日 塩見岳（右記参照）

● その他の話題

・ニペソツ山行の本隊は好天、好酒、好温泉に恵まれ、往復11時間の長丁場にも拘らず全員無事登頂・下山とのこと。しかし、延長戦組（蛭川、竹中、小野）は台風13号の雨に恵まれ、沈殿・暴飲か？（以上、本間記）

・アニハカラソや、北海道は台風一過後の晴天。強風の中、ニセコアンヌプリ、イワオヌプリ登頂とこちらも計画完遂（この項、竹中記）

・高橋さんが100名山の小野さんと白馬・白馬鑓に回った際の花の写真（100枚）を披露、佐薙さんのチェックが入っていた。高橋さんも最近は「神様」よりも「花」のお話が多くなりました。

・秋の懇親山行（蓼科・アダージオ集合）の山行予定も徐々に固まりつつある様です。霧訪山（三井・遠藤・山本（尚）・蛭川）／有明山（高橋・竹中・小野）／国師・金峰山（佐薙他）／中央アルプス・烏帽子岳（佐薙他）／蓼科山（本間・三井・遠藤）／甲斐駒（西牟田・金子）等です。詳細、参加希望等は夫々のグループにお問合せ下さい。

◎ 今号も予定より大分遅れての発行となつてしましましたが、出来上がってみれば普段お目にかかるない山の詩から始まり、内容の濃い登行記や楽しい山旅等々、お楽しみいただける読み物になつたのではなかと思います。ご覧の通りやや質素な体裁といたしましたが、これは費用を出来るだけ節約して、現行の年3回発行を何か死守したいとの強い思いから生まれた試みですので、よろしくご理解のほどお願ひいたします。

(有賀)

◎ 9月中旬に北海道のニペソツ山行でご一緒させていただいたばかりの渡辺嘉佑先輩が10月28日に急逝され、驚いています。針葉樹会員13人が参加するなか、1ピッチ目で遅れがちだつたため、2ピッチ目からペースメーカーになることを申し出られて2番手を歩かれました。このため一糸乱れぬゆっくり歩きのパーティとなり、みごと全員が登頂できたのです。亡くなられた当

日もウォーキングの会に参加する途中、駅で倒れられたと聞きます。自然体でありながら氣概を感じさせるお姿が目に浮かび、ご機嫌よろしく旅立たれたのではないかと感じました。合掌。

(川名)

◎ 三月会のお楽しみ、山本さんのこぼれ話ですが、紙数の関係で9月分は割愛させていただきましたのではありませんがご了承ください。

あちこちから今年はどんぐりがちつとも落ちてないという話が伝わってきます。所沢のヤマ（雑木林）でも今年はどんぐりの成りが悪くて、ほとんど実が落ちていらないという有様です。どんぐり盆栽の種を集めようとしていたアテがすっかり外れました。里へのクマの出現が今年は異常に多いというのもうなづけます。皆様も思わぬ所でクマに出つくわすかもしませんのでお気をつけて。

(井草)